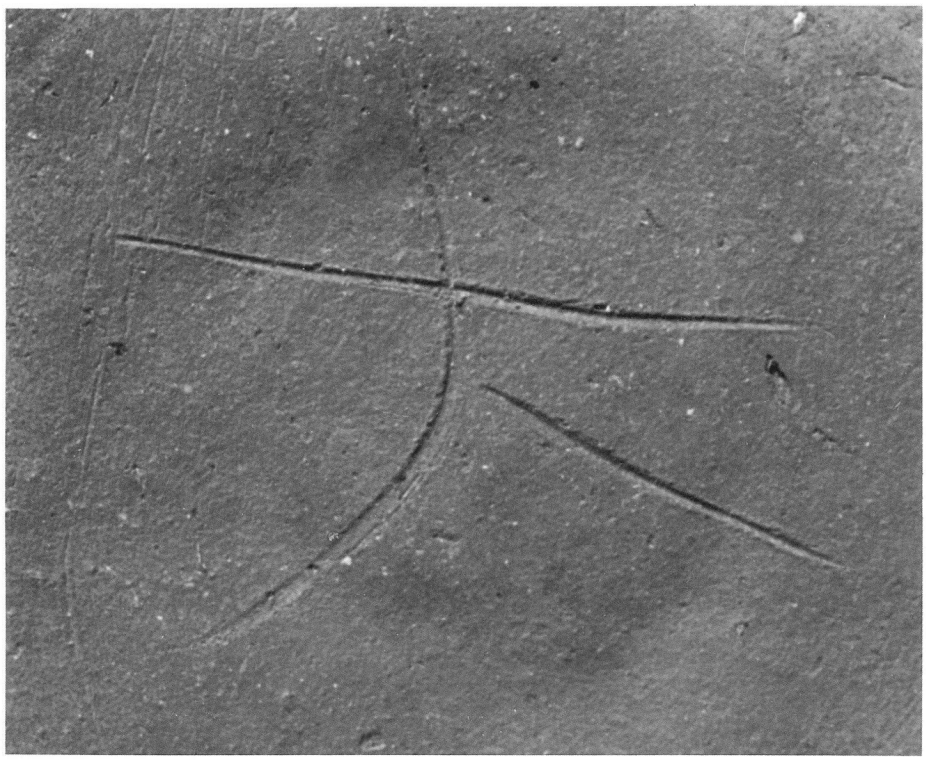
天伯古墳

長野県上伊那郡中川村片桐天伯



1986

中川村教育委員会

天伯古墳

長野県上伊那郡中川村片桐天伯

1986

中川村教育委員会

序

天伯古墳は中川村片桐の中央部落のかつては前沢川の河川敷と思われる扇状地にあり，果たして古墳であるか否かも議論が分かれていたところでした。地区内には既に発掘調査の終った六万部古墳があり，東山道堅錐駅もこの地区内にあったとする説に固まりつつあるといった歴史上からも重要な場所に位置しています。

今回の調査は先づ確認調査から始まり，横穴式石室をもつ古墳時代後期の古墳であることが確認されたので，昭和59年９月20日より発掘調査にとりかかり12月21日に復元作業まで終了しました。

調査の結果石室の後方部と前方羨道部の一部が破壊されていたもののこの古墳の規模構造を測定することができ，人骨２体と多くの副葬品を発見したほか現場から縄文時代中期，同時代後期及び弥生時代後期の土器片も出土し，今回の調査により，重要な意義を抱えているこの地区の歴史を識る上で一歩も二歩も前進できたものと信じます。

この発掘調査にあたり，所有者の松下昇氏の全面的な協力を戴き，調査団長友野良一先生をはじめ，調査員の先生方・関係者のご努力により無事調査を終えこの報告書が刊行できますことを心から感謝申し上げます。

昭和61年５月

中川村教育長　北　沢　正　美

例　　言

1．本書は昭和59年に実施した文化財保護法第98条の２第１項の規定に基づく，埋蔵文化財の学術発掘調査の報告書である。

2．本事業は中川村教育委員会が実施した。

3．本報告書は，昭和59年に発掘調査を行い検出した遺物等の整理をし，昭和61年度に報告書を作成することとした。

4．各遺構の図面の縮尺は$\frac{1}{100}$を基準としたが，一部$\frac{1}{500}$のものもある。遺物の縮尺は主に$\frac{1}{2}$としたが，中形の物は$\frac{1}{3}$・$\frac{1}{4}$とし，小形な物は$\frac{1}{15}$にしたものもある。

5．本報告書の執筆者及び図版作成者は次のとおりである。

○本文執筆者　友野良一・松下節子

○遺構図　高山よし子・松下節子

○遺物の実測　小木曽清・高山よし子・松下節子

○遺物の復原　木下平八郎・小木曽清

○写真の撮影・図版　木下平八郎・友野良一

6．本報告書の編集は教育委員会が行った。

7．遺物及び実測図は中川村歴史民俗資料館に保管してある。

目　　次

序

例　言

第Ⅰ章　発掘調査の経緯 …… 1

第１節　発掘調査に至るまでの経過…… 1

第２節　調査会の組織…… 1

第３節　発掘調査の経過…… 2

第Ⅱ章　遺跡の環境…… 5

第１節　遺跡の環境…… 5

第２節　地形及び地質…… 5

第３節　歴史的環境…… 8

第Ⅲ章　構造と副葬品…… 11

第１節　遺　跡…… 11

第２節　副葬品…… 15

第３節　天伯古墳出土人骨…… 27

所　　見 …… 29

図　　版 …… 31

あとがき …… 43

挿　図　目　次

第１図　天伯古墳の位置図…… 5
第２図　前沢川流域図…… 6
第３図　天伯古墳周溝地質図…… 7
第４図　天伯古墳附近の地質図…… 7
第５図　天伯古墳附近の遺跡分布図…… 8
第６図　天伯古墳平面図……10
第７図　天伯古墳石室実測図……12
第８図　出土遺物配置図……14
第９図　副葬品　直刀・圭頭・鉸具・鉄製留金具類……16
第10図　副葬品　鉄鏃・刀子……18
第11図　副葬品　金環・銀環・管玉・ガラス小玉…… 20
第12図　須恵器実測図…… 21
第13図　須恵器実測図…… 22
第14図　土師器実測図…… 24
第15図　天伯古墳出土土器拓影及び実測図 26
第16図　天伯古墳人骨出土状況図…… 27

図　版　目　次

図版１　天竜川東より天伯古墳遠望(上)　天伯古墳を西方より望む(下)
図版２　天伯古墳　天井石・石室内(奥より望む)
図版３　天伯古墳　石室内部(奥より望む)
図版４　石室前方より(上)　奥壁(下)
図版５　金環・砥石(上)　直刀(中)　須恵器・刀子(下)出土状態
図版６　管玉(上左)　鉄鏃(上右)　圭頭(中左)　須恵器(中右)
人骨(下左)　直刀(下右)出土状態
図版７　出土遺物　ガラス小玉・金環・銀環・管玉(上)　直刀(中・下)
図版８　出土遺物　歯(上)　刀子(中左)　鉄器(中右)　鉄鏃(下左)　砥石(下右)
図版９　出土遺物　須恵器(左側)　土師器(右側)
図版10　出土遺物　提瓶(上左)　須恵器(上右中)　土師器(上右下)
石室(下左)　祭(下右)

表　　紙

天伯古墳石室内より出土した須恵器内に箆書きされた「大」の文字

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査に至るまでの経過

天伯古墳は，古代東山道堅雒駅が近くにあったといわれる地籍で，長野県上伊那郡中川村片桐に所在し，同地区の松下昇氏の所有地となっている。この地籍は天竜川支流・前沢川の河川敷中にあり，大正年間より古墳であるかないかで，長い間論争があった古墳である。調査の必要性を説く人が多く，中川村教育委員会は文化財調査委員会に計り，昭和59年６月に確認調査を実施した。調査の結果横穴式石室をもつ古墳時代後期の古墳であることが確認され，文化庁へ埋蔵文化財（古墳）発見届を提出した。

昭和59年７月11日文化庁へ発掘調査についての通知を提出し，村教育委員会の編成した天伯古墳発掘調査団が発掘業務を遂行することになった。９月20日天伯古墳調査会を開催し発掘計画について協議し，同日教育委員会・土地所有者関係・調査団等が参集してお祓いを挙行した。

第２節　調査会の組織

○中川村教育委員会

教育委員長	杉沢　要
委員長職務代理	斉藤英雄
教育委員	米山俊博
〃	米沢正明
教育長	北沢正美
教育次長	湯沢幸雄
〃	石原　守
主事	松下節子

○天伯古墳調査団

団長	友野良一（日本考古学協会員）
調査員	根津清志（長野県考古学会員）
〃	木下平八郎（　〃　）
〃	小木曽　清（宮田村）

第３節　発掘調査の経過

年月日	日　　誌
昭和59年	朝より現地にて確認調査の打ち合せを行う。着手前の写真撮影。竹・杉などがある
６月４日	ので，地主の了解を得て調査地に生えている竹・杉を切り倒す。
５日	竹の根を取り除くが，しっかりと根が張っているため作業はなかなか進まない。
	石室の天井石が三つ姿をあらわす。北側の天井石及び東側の側壁の石の一部がなく
	なっているように思われたが、古墳であることに確信を得た。
６日	竹の根の取り除き。石室天井石の実測図作図（$\frac{1}{30}$）。石室後方（北西側）よりふく土
	（石室内に落込んだ土）を運び出す。
７日	天井石より約１ｍほどふく土を運び出す。全体実測図作図($\frac{1}{100}$)。断面図（$\frac{1}{20}$）。
８日	石室及び全体の実測図作図，レベル測量を行う。現場の写真撮影。周辺の竹や杉の
	大木等を利用して，シートの屋根を張る。
11日	測量・作図等の点検を行い，確認調査を終了とする。
９月20日	調査打ち合せを行い，午前11時よりお祓いの儀を行う。午後より器材運搬等準備を
	行う。
21日	シート（屋根）を取り外す。確認調査の深さで羨道部方向へ掘り進める。
24日	引き続き羨道へ向って掘り進める。中央の天井石の下まで進む。搬出したふく土は
	ふるいにかけることにした。
25日	羨道まで進む。羨道部（南東側）よりも掘り始めた。ふく土の中より弥生時代後期
	の土器片が見つかる。
26日	天井石より１ｍ下の地点までふく土搬出完了。ピンを差し込むと70cm下に石らしき
	ものが確認された。
27日	もう50cm掘り下げることとした。土師片等出土。土は袋に入れる。
28日	奥壁より５ｍ近くの断面図実測図。完形品の須恵器（杯）出土。
29日	奥壁より３ｍ附近より人骨出土。奥壁より５ｍ完形品の須恵器出土。内底に「大」
	の文字を確認した。
10月１日	天井石等の落下を防ぐため、柱等を入れる。奥壁より２～３ｍ附近人骨出土。
２日	羨道部に土師片（内黒）、玄室に圭頭と思われる鉄器が出土。人骨写真撮影。
４日	人骨を箱に移す。羨道部の石は投入された物と思われるので，写真を撮って取りは
	ずす。石碑が倒れる危険があるので，すべて移転する。周溝の調査も始める。
５日	羨道部の石を除去する。石の下より須恵器や土師片等出土。奥壁まぎわの断面作図。

10月6日	羨道部より砥石が出土。人骨をNo.2の箱へ移す。周溝より須恵器・土師器又金環が出土。
7日	奥壁より4mに人骨出土。頭蓋骨と思われ，追葬であることがわかる。
8日	2体目の骨をNo.3の箱へ移す。奥壁の手前に鋲のついた鉄器出土。
9日	亀張の清掃，羨道の端を確認する。周溝を探る。調査速報No.1を発行。
10日	側壁の清掃（根等を切る）。奥壁より3.5m管玉1個出土。
11日	奥壁より羨道へ向けて清掃。羨道部の石の写真を撮ってからはずす。石の下より，砥石・金環・刀子が出土。
12日	清掃。東側壁に直刀（No.96）が出土。さらに前方に鉄器出土調査は明日にする。
13日	清掃。昨日の鉄器は鍔付きの直刀であった。
15日	清掃。直刀の写真撮影。
16日	亀張の清掃。直刀・直刀片の取り上げ。シートを亀張の上に敷く。
17日	遺物を研究室に運び，整理を行う。
18日	石室及び，天井石附近の清掃。写真撮影。
19日	写真撮影。清掃。午後より雨天のため遺物整理。
20日	雨天のため遺物整理。
22日	側壁の実測の準備。西側の側壁の実測図作図（$\frac{1}{20}$）
23日	西の測壁実測図作図。東の側壁の実測図準備。奥壁の実測図。
24日	周溝の掘り下げ。速報No.2を発行。
25日	周溝の掘り下げ。出土遺物測量及び取り上げ。
26日	亀張の実測準備。周溝の掘り下げ及び遺物取り上げ。
27日	亀張の実測図。周溝の掘り下げ。
28日	石室附近の実測図及びレベル測量。
29日	出土遺物の整理
11月2日	
3日	中川村歴史民俗資料館特別展「天伯古墳」（～30日）
27日	天伯古墳現地一般公開（～28日）
12月1日	床面近くの土を場所ごとに袋に入れてあったものを整理。
2日	袋の土を整理。
3日	袋の土を整理。
4日	袋の土の整理。及び人骨（骨粉・骨片）の納骨。

12月 6 日	石室に土を埋め込む。(重機使用)
7 日	土の埋め込み。及び，土を運び込み。
8 日	天井石上へ土を盛り上げる。
21日	古墳復元作業を完了とする。
昭和60年	報告書作成のための整理作業を始める。
12月24日	
昭和61年	
5 月20日	報告書作成の作業終了。

天伯古墳発掘調査にあたって，御理解と御協力をいただいた地主の松下昇氏，石工作業にあたられた宮下二郎氏，また，石室内の危険な作業等発掘に直接参加下さりました方々に心より感謝申し上げる次第であります。

発掘調査に協力・参加された方々（順不同・敬称略）

松下　昇・松下千代子・高山よし子・本田　秀明・墨矢　勇夫・南沢そみゑ
宮崎　治雄・下平　博行・新井甲子代・永井みよ子・米山　節子・丸田　南枝
下平　敬子

第II章　遺跡の環境

第１節　遺跡の位置

天伯古墳の地理的位置は，長野県上伊那郡中川村片桐（旧 字 天伯）3,737番地に所在する。古墳の所有者は同村松下昇氏となっている。古墳の所在する位置は，東経137度55分28秒，北緯35度37分35秒，標高501.2m，前沢川の河川敷の中にある。古墳に至るには，国鉄飯田線伊那田島駅より東方1.1km（徒歩20分余）・国道153号線より西方0.3kmの地点にあたる。

第２節　地形及び地質

１）地形（第1.2図）

天伯古墳に関係している地形を概観すると，古墳の立地している所は前沢川の河川敷の中に当っているがこの天伯古墳を考えるうえで前沢川の成立について考慮しておく必要がある。

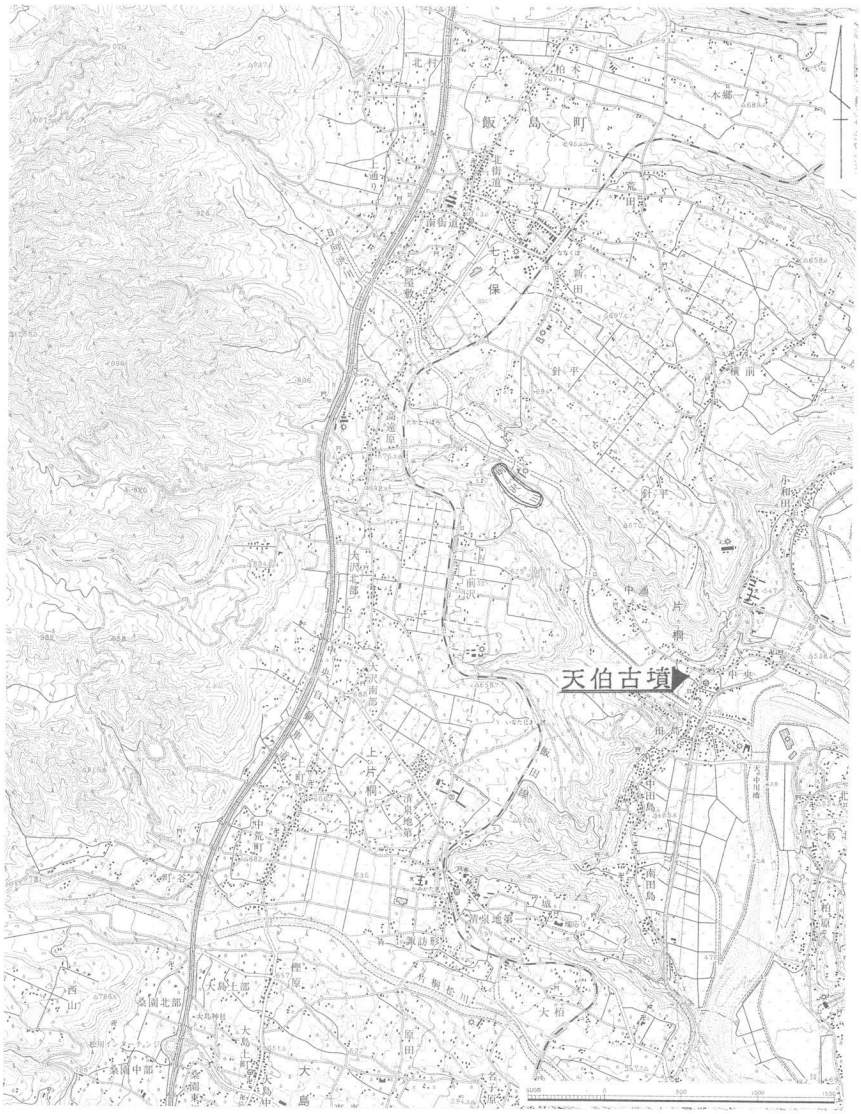
この前沢川は天竜礫層，つまり洪積層を田切って出きた河川である。この河川の源をたどれば，中央アルプス，鳥帽子岳（2194.5m）の東方小八郎岳・宝石山金五郎・丸山・権現山・行者

第１図　天伯古墳の位置図

山・鳴尾山などの諸山の東麓より流れ出る大小の支流河川日向沢川・矢ノ沢・高遠入川などである。この支流を集めた前沢川は天竜川に合流している。この前沢川の源たる前記諸山は市田花崗岩が主体で，非常に崩壊しやすい地質構造を有しているので，過去大洪水に何度か見舞われた荒川の一つである。近くでは江戸時代天明年間の大洪水，大正12年の大災害は幾人かの人命が亡なわれ，前沢川の耕地は流出したり冠水した。また，昭和36年災害においては，大規模な河川改修が行われた。昭和58年の豪雨時には七久保高遠原山祇神社の北の沢が崩壊し中央自道車道を埋め，高遠原と前沢川流域に緊急避難命令が発せられた。

こうした荒川である前沢川を数理的に見てみると，流域面積19.38㎢，河川の延長7.5㎞，最大勾配（山地）44％，平坦で6％の急勾配の河川である。前沢川が天竜川に合流する附近で測定すると，上幅1040m・河床の幅 320m その比高は90～100m，断面積33,350㎡を測る。

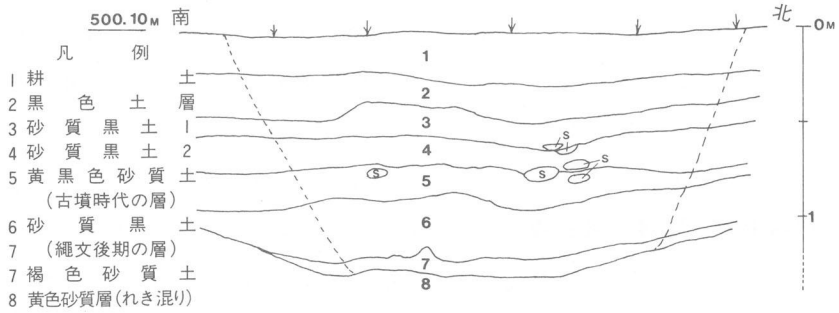
昭和36年災害の前沢川河川改修においては，流路溝の断面積60㎡，流速10m/sとして，毎秒 600㎥の流量で計算されて設計を試みておられるようである。しかし 1,000㎜以上の降雨には問題があると思われる。



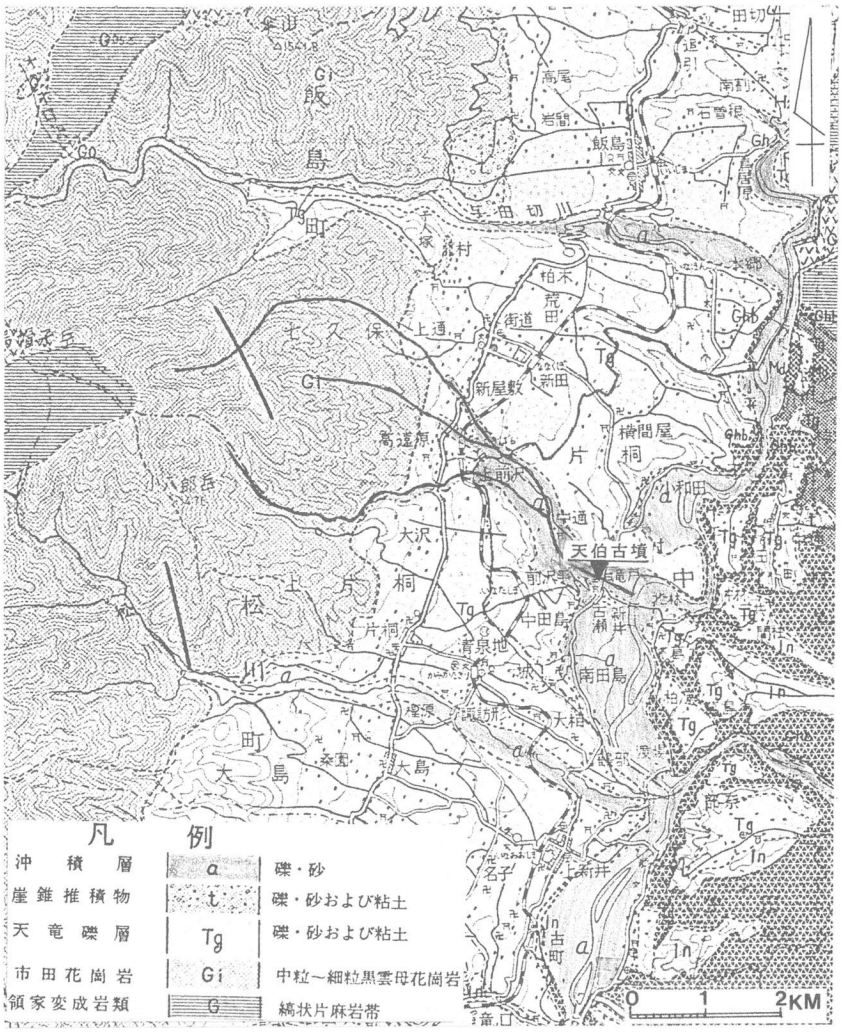
第2図　前沢川流域図

2）地　質（第3･4図）

天伯古墳は前沢川の河床に作られたものであるが，この前沢川の地質を概観すると，前沢川は木曽山脈の砂礫で作った洪積層（天竜礫層）を開折して出きた川である。現在前沢川の段丘面が露頭している所がないので，与田切川の露頭を参考にすると，木曽山脈を構成する花崗岩・変成崗類・片麻岩類の砂礫と古期ローム層が何層という層になって堆積していることがわかる。おそらくこの層は50～100m程堆積して洪積層を構成していることがうかがわれるである。前沢川現河表は、これら洪積層の上に沖積層として，堆積されている層である。



第３図　天伯古墳周溝地質図

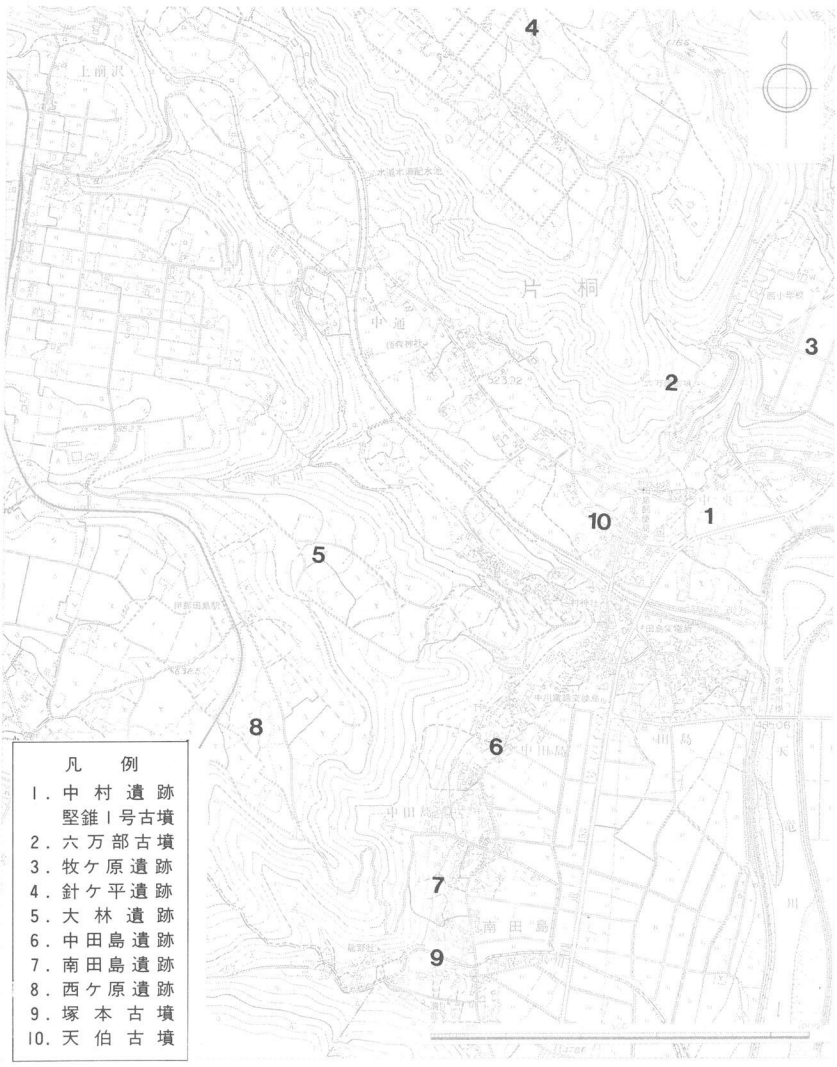


第４図　天伯古墳附近の地質図（長野県上伊那誌自然篇附図より）

第３節　歴史的環境（第５図）

天伯古墳の周辺には，六万部古墳（古墳時代末期）の古墳・塚本古墳（古墳時代後期）が知られていたが，昭和61年２・３月に伊南農業協同組合のりんご選果場建設に先立って発掘調査が行われた中村遺跡より新しく５世紀後半の円墳の古墳が発見され、「堅錐１号古墳」と名命された。天伯古墳と同様，堅錐１号古墳も前沢川の河川敷に存在する古墳として話題を呼んだ。

中村遺跡　堅錐１号古墳(1)　は墳丘が完全に取り去られ，周溝のみが残った古墳で直径19ｍ周溝幅３ｍのおそらく竪穴式石室の古墳（５世紀後半）であったと思われる。現在上伊那最古の古墳として注目される古墳である。また，堅錐１号古墳の西側工場敷地内に，横穴式石室の古墳の残欠が３基あったことが当時の地権者によって確認されているところから，これら３基の古墳は６世紀前半の古墳と推定される。天伯古墳は６世紀中頃と考えられるので，中村遺跡の堅錐１号古墳を合わせた４基の古墳群は５世紀６世紀に成立したことになる。天伯古墳と同じ前沢川河川敷にこれら古墳が発見されたことは，今迄天伯古墳の位置が河川敷中にあることの疑問を解く鍵となったのである。しかも，中村遺跡は天伯古墳の封土中から検出された縄文中期後葉の遺物・弥生後期の遺物な



第５図　天伯古墳附近の遺跡分布図

ど，天伯古墳成立以前にこの附近にこうした村が存在することを示唆してくれた疑問も，縄文前期末諸磯Ｃ式時代の古い村が発見されたことにより，見事に証明してくれた。前沢川は，縄文時代前期末から古墳時代中頃迄は，各時代の村村が存在したことを証明してくれた。この意義は計り知れない歴史の深さを物語ってくれるものである。

六万部古墳(2) は昭和52年度調査が行われ，金銅製柄頭をはじめ，直刀・鉄鏃・小玉・馬具刀子・須恵器・土師器・人骨などが発見され，古墳時代後期の古墳であることが確認された。古墳時代の終りを知るうえで，重要な位置にある古墳である。

牧ケ原遺跡(3) は天竜川に突出した牧ケ原台地にあり，縄文中期・弥生後期・古墳時代・平安時代の集落があったことが調査によって証明されている。この台地は天伯古墳に一番関係の深い遺跡と思われる。

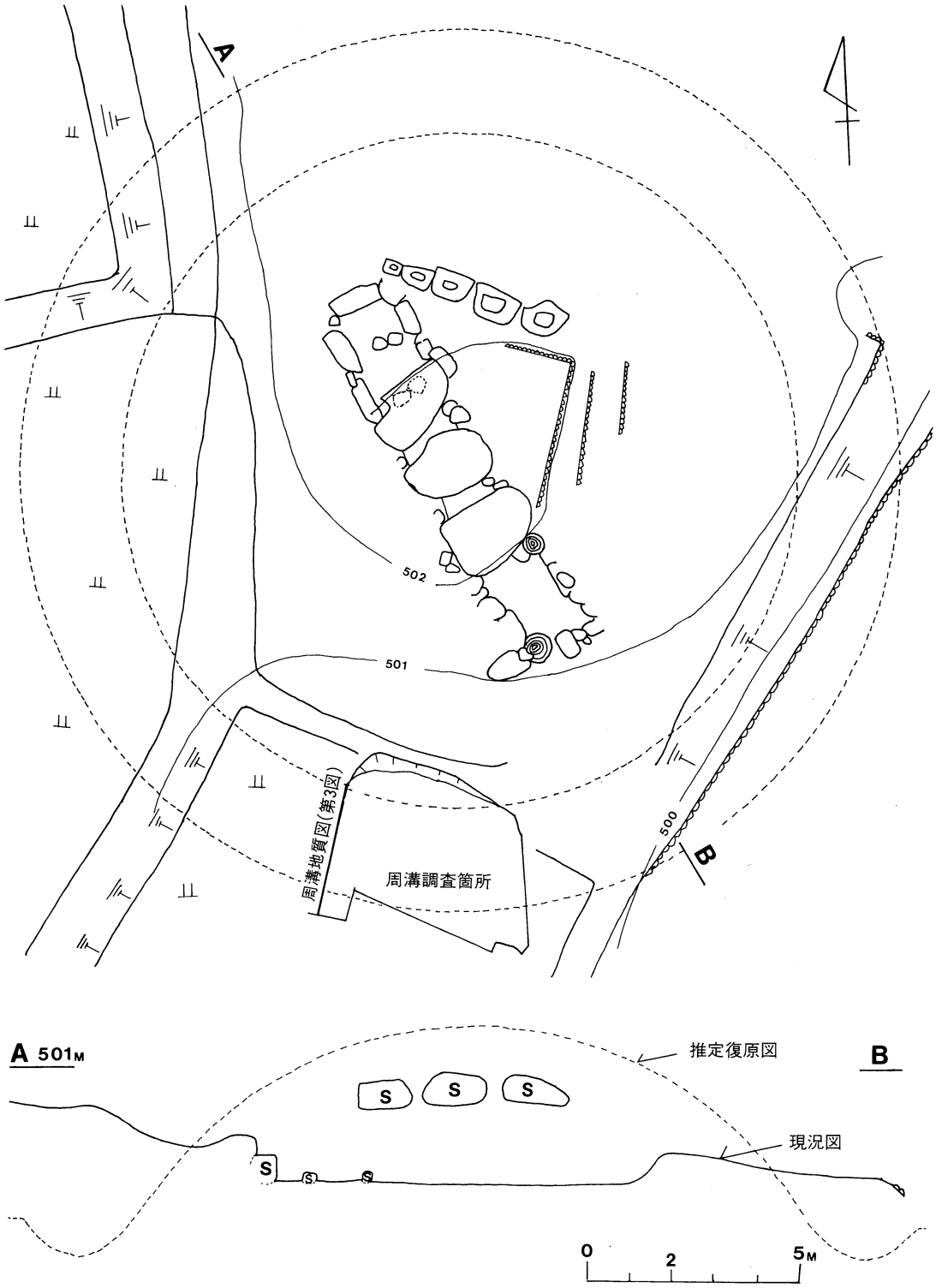
針ケ平遺跡(4) は牧ケ原台地の西段丘上にあり，弥生時代後期の集落があった遺跡である。天伯古墳から出土した弥生時代後期の遺物と同時代であることから，台地上の遺跡と前沢川の河川の中と同時代の遺跡としての関係を考えるうえで，注目すべき遺跡である。

大林遺跡(5) は縄文時代中期・弥生時代後期の遺跡である。天伯古墳より出土する遺物と同じ時代なことから，天伯古墳成立以前の文化を考えるうえで重要な遺跡である。

中田島遺跡(6)・南田島遺跡(7) にも天伯古墳と同様縄文時代中期後葉・弥生時代後期の遺物を出土しているところから，縄文時代中期・弥生時代後期の集落が存在していた遺跡である。そのほか，土師器や須恵器も出土するところから，天伯古墳と同年代の遺跡が存在したことも事実なので，天伯古墳との関係がどのようであったのか，今後の研究に待つものがある。

西ケ原遺跡(8) は中田島遺跡より比高100ｍ以上も高い西段丘上にある遺跡である。ここにも縄文時代中期後葉・弥生時代後期の住居跡が発見された。天竜川の河川敷に近い遺跡と段丘上の遺跡という面での研究において，大変興味深い対象である。

塚本古墳(9) は南田島遺跡の南にあり，現在ほとんど破壊されてしまい塚の形態をつかめない状態である。塚の附近に古墳の石室に使われたと思われる石が，土蔵の土台石や庭石などに使用されている。これらの石からこの塚本古墳は古墳時代後期の横穴式石室ではないかと推定される。言伝えでは直刀が出土したと言われているが，遺物の確認がされていないので，天伯古墳と年代の関係については現在のところ不明である。こうしたことから，天伯古墳の被葬者の支配範囲を推定することはできないが，今後塚本古墳の研究が進めば，片桐地区の古墳の推移が明確になるものと思われる。



第6図　天伯古墳平面図

第Ⅲ章　構造と副葬品

第１節　遺　　跡

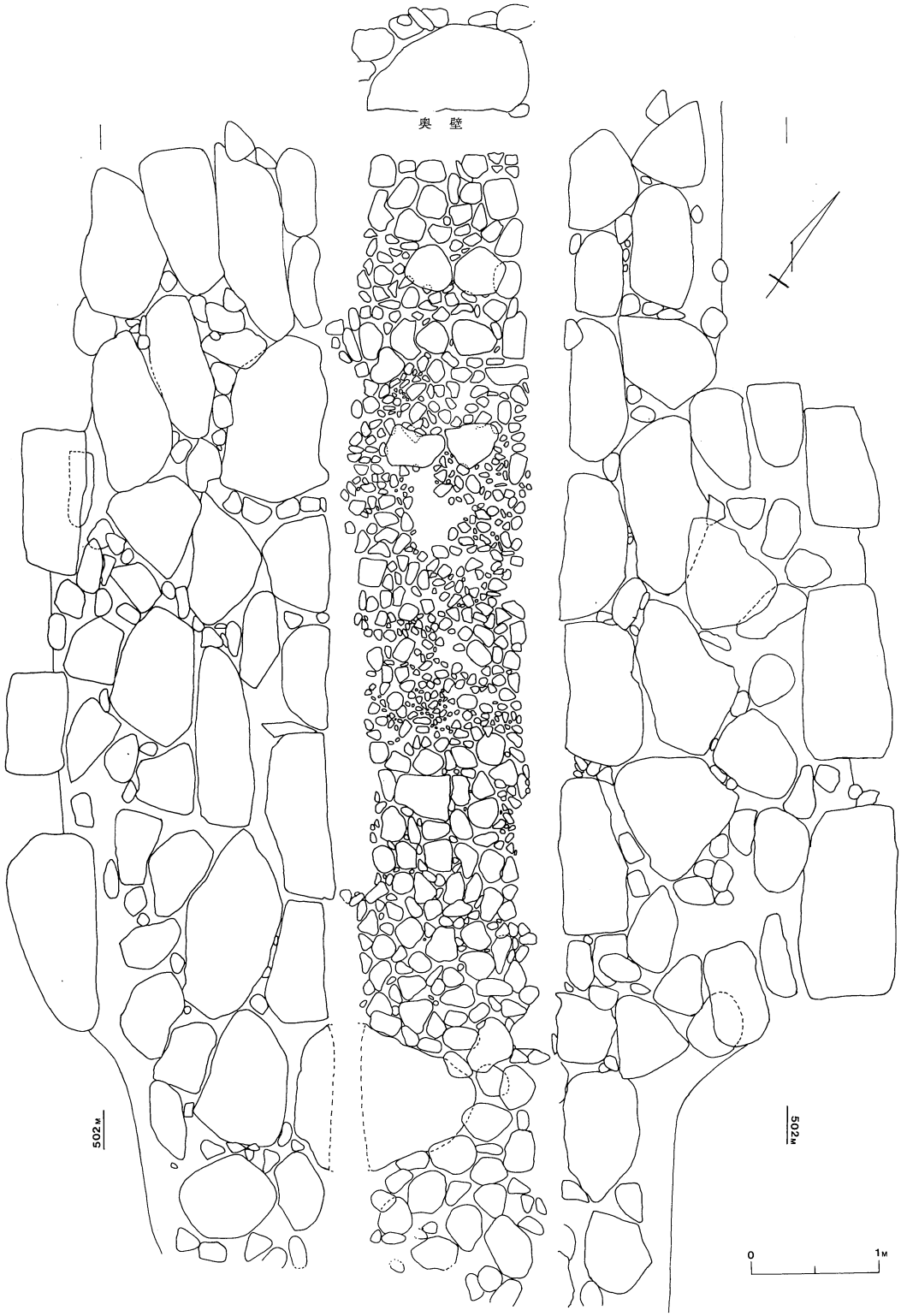
１）天伯古墳附近の事情

天伯古墳は中川村片桐天伯地籍に所在する古墳である。古墳は前沢川の沖積地に築造され，古墳の北には「古前沢」と呼ばれている，（古墳との比高3～4ｍ）低い所を流れる小河川がある。

この前沢川のことは第Ⅱ章第２節で述べてあるので，ここでは直接古墳に関わることについて述べる。古墳の所在する場所より西方約1㎞位の所に昔は自然に出きた巨岩の堤防があった。現在その巨岩はほとんど取り去られ，わずかに一・二個残るのみとなっている。古くはこの自然堤防から下流は細長い尾根状になっていたらしい。この尾根状の小高い丘に栢森の社がある。現在神社の境内に直径1.5ｍ程もある大木の伐根が残っている。この大木から推定すると，３～400年あるいはそれ以前から，この場所に社があったと思われる。また，栢森神社の東に観音堂があったが，現在多くの石碑が立っており堂宇はない。しかし，かつては堂が出来た程であったのでこの地が安定していたことを物語ってくれる。江戸時代の記録に「天和年中（1681年）に大洪水がありムレ坂に至る」とある。また，正徳５年（1715年）に田島地区一帯が大洪水に見舞れ，文政11年（1828年）にも田島から舟山麓に至る前沢川の災害があったとある。近年の災害では大正12年で，古墳の近くにある地主の松下昇氏の住宅をはじめ，付近の民家では床上迄水がつき，滝戸から中村地籍の南の田畑はほとんど流出したと言われ，最も被害が大きかったようである。こうした大洪水にいく度か見舞れ，天伯古墳周溝迄は水が流れたが，古墳自体は無事に今日迄残ってきたのである。

２）古墳の現況

天伯古墳は長い間「古墳である」「古墳ではない」と論議されてきたのは，以上のような自然環境の中に存在していたからである。本古墳は北側と南側の天井石及び，東側の側壁の一部の石がなくなっており，破壊が進んでいた。現在ここにはいくつかの石碑や供養塔，また，天伯殿などが建てられている。これらの中には，古墳の石を使用して作られたと思われるものがあり，その一つに「元録14年」の銘がある「南無阿弥陀仏」の石碑がある。天伯古墳が破壊され始めた時がいつなのかは定かではないが，これらの石碑建立の頃よりと思われ，古墳と言おおか石碑や供養塔・社殿などが建つ場所へと変わって行ったと思われる。そのほか，墳丘の北には，旧片桐村役場の倉庫が建てられていた。古墳の東には古い道が通っている。また，古墳の北に痍申塔や古い塔などが建てられている場所は，かつては村の辻であって，古い時代の交通



第７図　天伯古墳石室実測図

の要地的なことが考えられる。近くの「滝戸」と言う地名も南北朝時代の頃から使われていることより，十分中世から古代に使われていた可能性があり，自然的・歴史的な意味は深いものがあると予想される。

3）墳　丘

今回の調査では，残存していた石室と周溝から本古墳の規模及び形態を推定した。

墳丘の規模は石室の中心から周溝内壁までを測定すると9mを測ることより，古墳の直径は18m内外となる。高さは墳丘の勾配を40°とした場合4m内外と推定される。墳丘の面は葺石があったものと考えられる。封土については古墳の南西の面に僅か認められる程度から考えて，本古墳の形態は円墳と思われる。

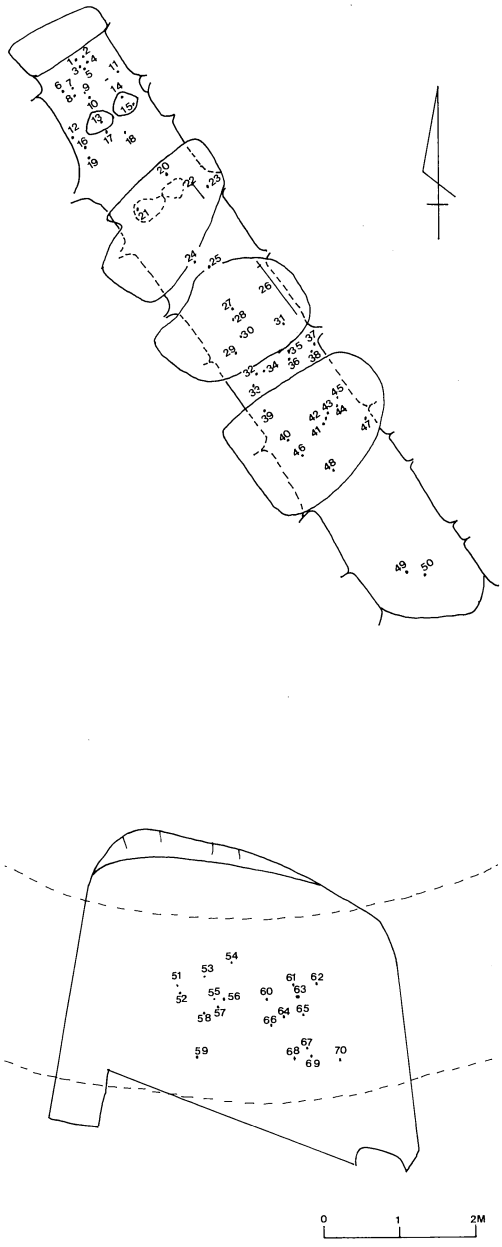
4）石　　室（第6図・第7図・図版2・3・4・10左下）

発掘調査した結果，石室の全長8.75m，幅1.4～1.6m，高さ1.7～1.8m。玄室の奥壁を北にして南東に開口する，羨道を有した単室の横穴式石室で，主軸の方向はN34°Wである。床面にはすべて，拳大から人頭大の河原石を平坦に敷きつめてあり，側壁は，石面で60～80cm大から1.0m～1.2m大の控60cm～1mの自然石で積まれている。石室内には排水施設は発見できなかった。また，玄室内に中扉があったとしても，その痕は認めることはできなかった。したがって，玄室の閉塞の状況を知ることができなかった。

床面上の施設として，奥壁より手前に上面が平らの径40cm床面より高さ20cm大の2個の石を並列してある。また，それよりさらに手前1.4mの位置に前記同様の2個の石が置かれ，その附近から多くの人骨が発見されたことにより，恐らくこの4個の石は棺を据える石と考えられるに至った。奥壁から約3mの位置に実測図で見るように床面の石が無い所があるが，この附近に今1体の別の人骨が追葬されていることが，中川村の加藤医師によって確認された。

5）天井石（図版2）

本古墳は前にふれたように，石室の前後が破壊されているので，天井石の全体を知ることができないが，中央部の天井石が幸い3個残っているのでまずそれより見ると，後部（北側）の天井石は長さ2.15m，幅1.45m，厚さ50cm。中の天井石は長さ2m，幅1.4m，厚さ75cm。前の天井石は長さ2.15m，幅1.5m，厚さ73cm，いずれも花崗岩の平盤石である。これらの天井石から，玄室の奥の天井石にはあと2個はあったものと考えられ，前方部にも2個存在したと推定されると，本古墳の天井石は7個使用されていたものと思われる。



第８図　出土遺物の配置図

No.	遺物No.	名　　称	押　　図
1	85	鉄　　鏃	第10図－ 1
2	84	鉄　　鏃	第10図－ 5
3	82	留　金　具	第 9図－ 6
4	61	鉄　　鏃	第10図－ 7
5	52	鉄　　器	
6	56	鉄　　器	
7	63	鉄　　器	
8	57	土　師　器　杯	第14図－ 2
9	62	鉄　　鏃	第10図-11
10	16	鉄　　器	
11	74	直　刀　片	第 9図－ 3
12	46	土　師　器　埦	第14図－ 3
13	50	圭　　頭	第 9図－ 4
14	49	鉄　　器	
15	79	土　師　器	
16	64	金　具　類	第 9図－ 9
17	65	鉄　　鏃	第10図－ 3
18	66	土　師　器　片	
19	36	鉄鏃，刀子	第10図－ 6，17
20	80	土　師　器　片	
21	99	砥　　石	
22	96	直　　刀	第 9図－ 2
23	31	土　師　器　片	
24	86	砥　　石	
25	87	管　　玉	第11図－ 4
26	100	直　　刀	第 9図－ 1
27	98	土師器短頸坩	第14図－ 5
28	24	土師器短頸坩	第14図－ 5
29	29	鉄　　鏃	第10図－ 8
30	88	刀　　子	第10図-14，15
31	89	須恵器提瓶	第13図－ 1
32	34	須　恵　器　杯	第12図-12
33	55	土　師　器　杯	第14図－ 1
34	90	鉄　　鏃	第10図-10，12
35	22	須　恵　器　杯	第12図－ 8
36	93	鉄鏃，刀子	第10図－ 2，16
37	35	須　恵　器　杯	第12図-11
38	94	須恵器提瓶	第13図－ 1
39	97	須恵器提瓶	第13図－ 2
40	67	土　師　器　杯	第14図－ 1
41	92	金　　環	第11図－ 1
42	68	土師器小形壺	第14図－ 6
43	70	須　恵　器　杯	第12図-10
44	69	須　恵　器　杯	第12図－ 8
45	91	砥　　石	
46	95	留　金　具	第 9図－ 7
47	73	須　恵　器　杯	第12図－ 9
48	78	須恵器杯，身	第12図－ 4
49	83	鉄　　鏃	第10図－ 4
50	81	須　恵　器　片	
51	周 6	土　師　器　埦	第14図－ 4
52	周 7	土　師　器　埦	第14図－ 4
53	周14	土　師　器　片	
54	周22	須恵器杯，蓋部	第12図－ 5
55	周19	須恵器杯，蓋部	第12図－ 5
56	周24	須恵器杯，身	第12図－ 2
57	周23	須　恵　器　甕	第13図－ 6
58	周25	須　恵　器　甕	第13図－ 6
59	周62	金　　環	第11図－ 2
60	周81	銀　　環	第11図－ 3
61	周33	須　恵　器　片	
62	周39	須　恵　器　甕	第13図－ 5
63	周31	須　恵　器　瑞	第13図－ 3
64	周29	須恵器杯，蓋部	第12図－ 5
65	周45	須　恵　器　瑞	第13図－ 3
66	周24	須恵器杯，蓋部	第12図－ 5
67	周76	縄文後期土器	第15図-12
68	周75	縄文後期土器	第15図-11
69	周49	縄文後期土器	第15図-12
70	周144	縄文後期土器	

6）鏡　石（図版４）

本古墳の鏡石は１個残っているだけだったが，２個使用されていたと考えられる。六万部古墳の鏡石も１個ではない。しかし，普通鏡石は大きな石１個で構成される例が多いようであるし，中村遺跡西側工場敷地内の３基の古墳の鏡石も巨石を使用してあったと言われているので鏡石はこの１個であったかも知れない。

7）周　溝　（第３図・第６図）

本古墳の周溝は墳丘の南側松下昇氏所有の水田の北端を借用して掘ったところ発見されたものである。周溝の発見された面は現在水田の地場下であり限られた箇所だけであるので，築造当時の周溝面の高さなど全体を確認することはできなかった。調査箇所での測定値の深さ等から考えてみて大方の有方を推測してみたところ，周溝の上の幅は水田造成のため多少破壊されていると思われるが，３ｍ～４ｍ，下幅２～３ｍ内外，深さは１ｍ～1.5ｍと考えられる。

周溝の作られた面から，古墳が築造された後，供養が行われたと考えられる用器が発見された。主な遺物は，須恵器の杯や甕形の破片，土師器の高杯や埦，金環などである。こうした例は，「堅錐１号古墳（５世紀後半)」や宮田村の「三つ塚古墳（６世紀前半)」にも見られた。こうした周溝内での供養が行われた例は５世紀から６世紀前半とされ，天伯古墳は６世紀中頃と推定されるところから，この様な祭法が存在したことを知る大変貴重な発見となった。

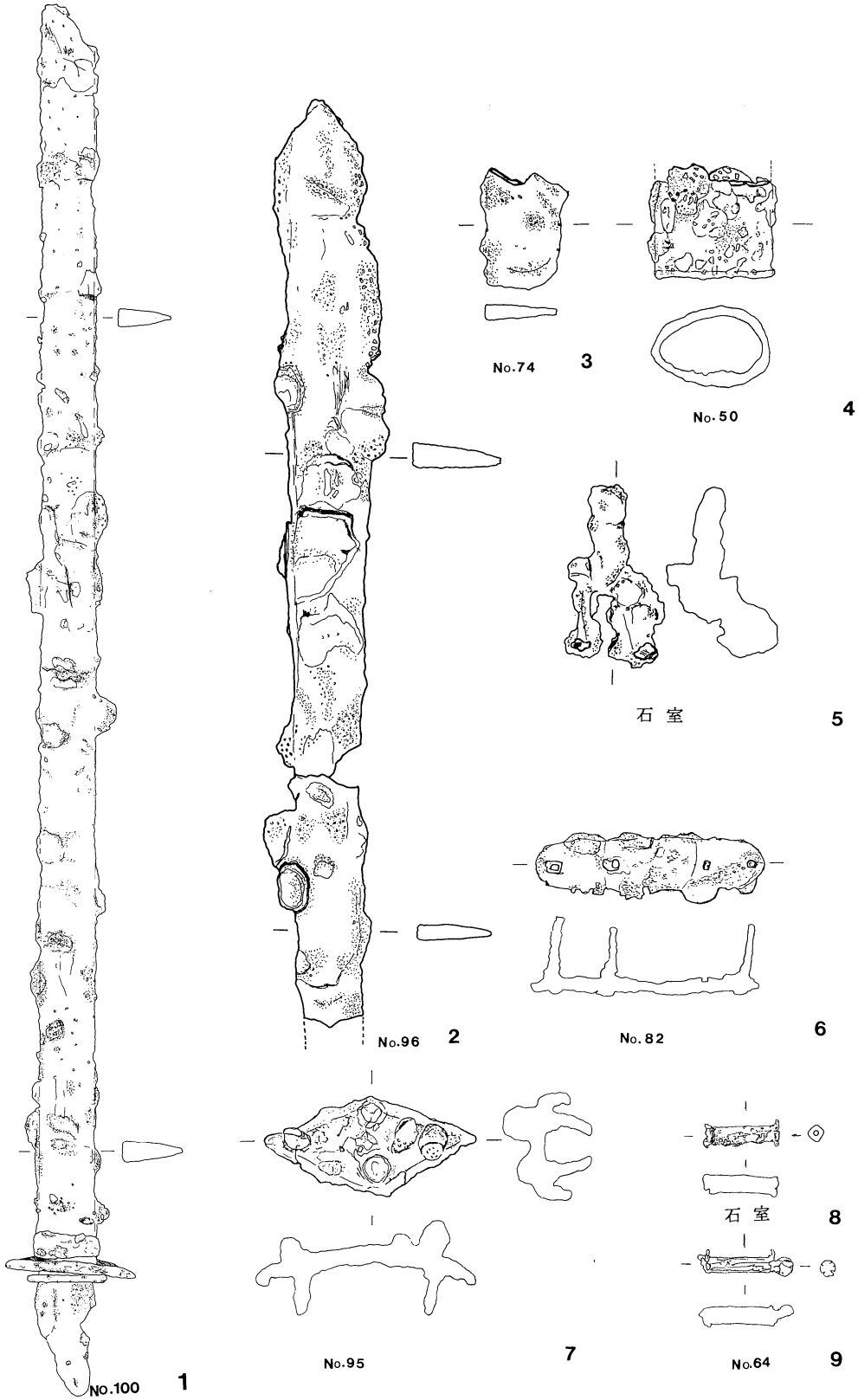
第２節　副　葬　品

1）石室内副葬品の出土状態　（第８図・図版５・６）

本古墳の破壊については，先に述べたように江戸時代中頃より石を利用するためのものと，後世盗掘によるものの二つの考え方がある。今回の発掘調査では，副葬品の位置が床面上に近い所に多かったせいか，玄室部の方は盗掘を受けなかったようにも見受けられた。しかし，羨道部の方は床面上30～50cmの埋没土の中より土師器を発見していることから，あるいは盗掘されたおそれもあると考えられる。

副葬品の原位置と考えられるのは、棺を据えた石より下部と考えられる。それ以上の没埋土の中にはほとんど発見されていないことから，玄室部の破壊は古い石取りのためと思われ，副葬品の位置まで達しなかったと判断した。

奥壁附近からは鉄鏃，鉄製鉸具，北寄りに直刀，奥壁に近い台石附近に圭頭，土師器の皿などが床面上より検出された。台石と台石との間には人骨が原位置を保って検出された。特に歯は集中して発見されている。前方の台石の北側に直刀が床面に接して発見された。また，前方



第9図　副葬品　直刀1(1：4)，直刀片2・3，圭頭4，鉸具5，鉄製留金具6・7，金具類8・9(1：2)

の台石附近から前方にも人骨や菅玉，砥石，北壁に接して直刀が検出された。ここより前方には人骨の検出はされず，この位置あたりが玄室と羨道部の境ではないかと思われる。羨道部からも，土師器の杯や須恵器の杯，長頸瓶，刀子，鉄鏃，砥石，金環などが検出された。これら副葬品は床面上がほとんどである。

2）副　葬　品（第８図～第14図・図版５～図版10）

直　刀（第９図１～３・図版５中・６下右・７中，下）

1．この直刀は羨道部の北側から発見された完形品である。全長83.9cm，刀身は76.4cm，刀身の幅1.2cm，茎の長さ7.5cmで2.5mmの目釘孔がある。鍔の長茎8.0cm，厚さ６mm。鉄製である。

2．この直刀は玄室内の東側壁の近くから発見されたものである。刀身の部分であるが，先と柄に近い部分を欠いている。現在の寸法は長さ28.1cm，刀身の幅2.5cm，厚さ５mm。

3．この直刀は玄室の北側奥壁に近い所から検出された，刀身の極一部である。

圭　頭　（第９図４・図版６中左）

本古墳出土の圭頭は鉄製である。頭部を欠いているので型式を窺うことができないが、形態は楕円形，長径3.7cm，短径2.5cm，厚さ３mmで，圭頭太刀であることは間違いないものである。発見された場所は玄室の奥壁に近い所である。

鉸　具　（第９図５・図版８中左）

轡の鉄庫鎖の一部で，錆がおびただしく両端を欠いているものである。これにより，馬具を副葬したことを知ることができた。

鉄製留金具　（第９図６・７・図版８中左）

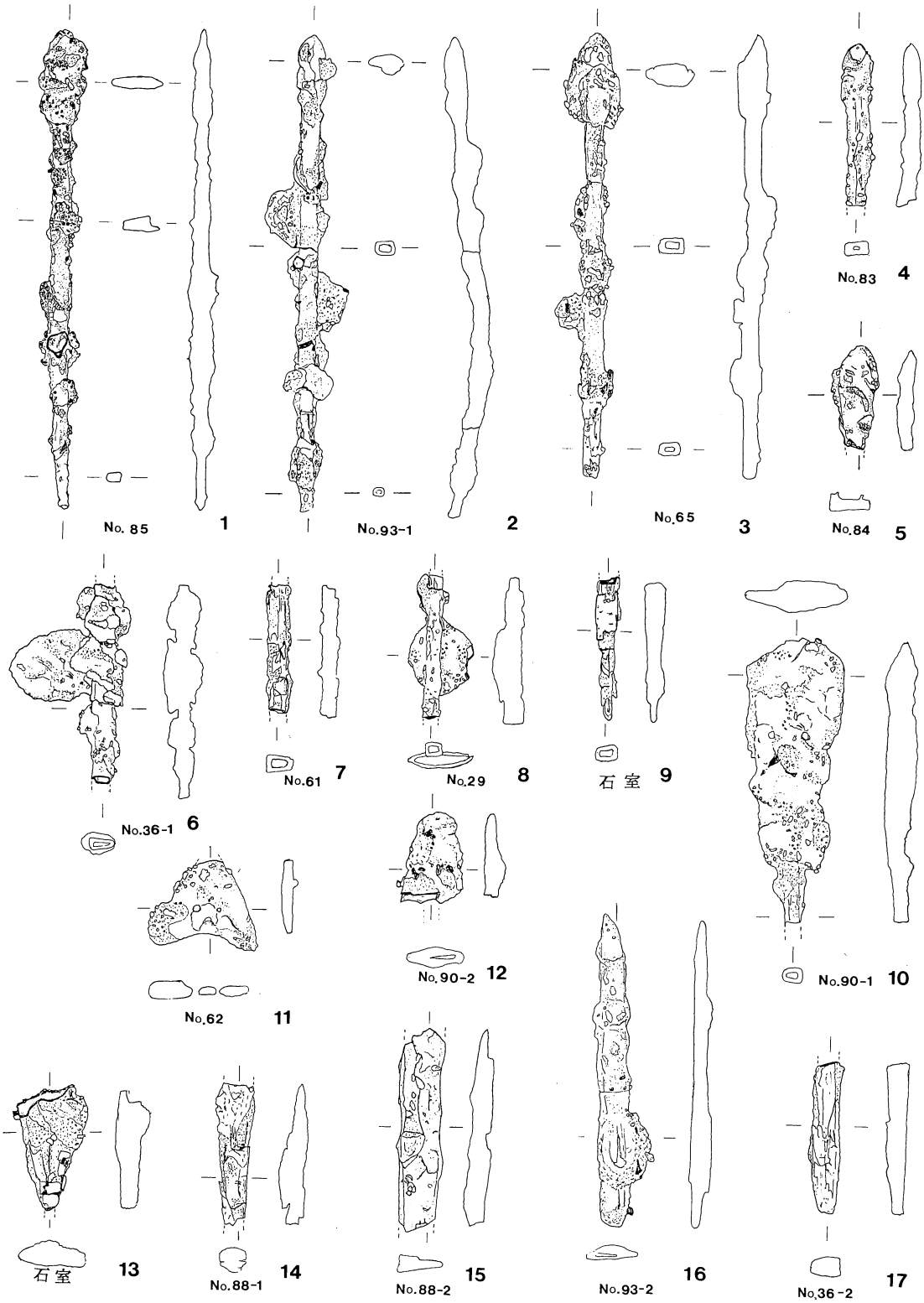
6．長さ6.6cm，幅３cmの菱形で厚さ４mm，４個の鋲がついた留金具である。石室より検出。

7．長さ6.9cm，幅1.5cm，厚さ３mmで長さ2.3cmの鋲が３本ある留金具である。

金　具　類　（第９図８・９・図版８中左）

8．長さ2.2cm，径５mm両端を打開き空胴の金具で，金具と金具との間に入れたものと思われる。石室内より出土。

9．長さ3.2cm，径６mmで，両端を打開き中心に金の芯を入れた，中間的な金具であると思われる。石室内より検出。



第10図　副　葬　品　　鉄鏃1～13，刀子14～17（1：2）

鉄　鏃　（第10図１～13・図版６上右・８下左）

鉄鏃として判明し実測できたものは13点で，全て石室内より出土した。

１．全長15.3cm，身の長さ６cm，幅1.2cm，茎の長さ9.3cm。尖根鏃である。

２．全身15.2cm，身の長さ５cm，幅９mm，茎の長さ10.2cm。尖根鏃である。

３．全長14.2cm，身の長さ4.7cm，幅1.1cm，茎の長さ9.9cm。尖根鏃である。

４．身のみの破片で、幅９mm。尖根鏃である。

５．身の先のみの破片で、幅1.1cm。尖根鏃である。

６．先と茎を欠いている尖根鏃である。腐食がはなはだしい。

７．尖根鏃の茎の部分と思われるもの。

８．尖根鏃の茎の一部と考えられるもの。

９．尖根鏃の茎の端部である。

10．平根鏃の身の部分であるが、尖端が不明である。

11．平根鏃の頭部で先を欠いているもの。幅3.4cm，厚さ3.5mm。実測図に見るように径２mmの小穴が設けられている。

12．平根鏃の身の部分と考えられるもの。

13．平根鏃の身の部分と思われるもの。

刀　子　（第10図14～17・図版５下・８中左）

14．刀子の茎の部分である。

15．刀子の身の部分であるが，先を欠いている。

16．長さ9.7cm，幅1.1cm，厚さ4.5mm。刀子の身の部分である。

17．刀子の茎の部分と考えられるもの。幅９mm，厚さ５mmを測る。

金　環　（第11図1・2・図版５上・７上）

１．石室内より発見されたものである。環の径3.25cm，身部の径8.5mm，両端の隙間２mm。銅環に金箔を張り付けたものである。

２．周溝より検出されたもので，環の径2.2cm，身部の径４mmで内側に金張りが残る。

銀　環　（第11図３・図版７上）

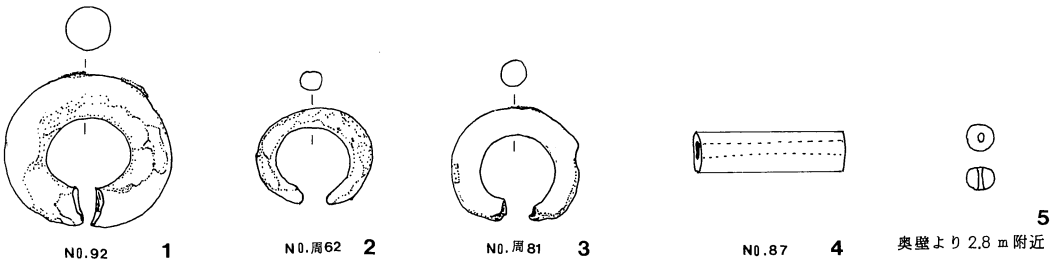
周溝より検出された銀環である。環の径2.5cm，身部の径５mm，両端の隙間５mmで，銅環に銀を張ったもの。

管　玉　（第11図４・図版６上左・７上）

管玉は石室内より発見されたものである。長さ３cm，径７mmで，両端から開けられた小穴の径は３mm。材質は緑色岩と思われる。

玉　類　（第11図５・図版７上）

ガラス製の青色小玉。径４mm，紐通しの穴の径1.5mm，厚さ５mm，石室内より検出。



第11図　副　葬　品　　金環1・2，銀環3，管玉4，ガラス小玉5　（1：1.5）

須　恵　器　（第12図第13図・図版９左・10上左・上右）

杯（身）（第12図１～３）

１．口径9.7cm，蓋受までの径11.6cm，立ち上り1.1cm，器高４cmである。色調灰褐色で焼成は良好，石室内より出土。

２．口径110.65cm，蓋受までの径11.75cm，立ち上がり1.3cm，器高2.8cmを測る。色調灰褐色焼成良好で，周溝より検出。

３．口径10.6cm，蓋受までの径12.65cm，立ち上り1.6cm，器高3.75cm。色調灰褐色・焼成良好で，石室内より出土。

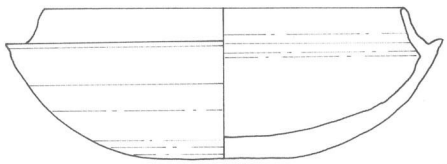
（蓋部）（第12図４～７）

４．径10.4cm，器高4.3cm。肩部に一条の稜をつくり，一本の沈線をめぐらしている。石室内より検出。

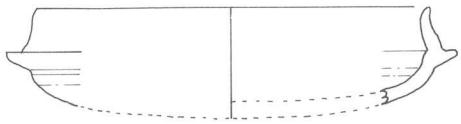
５．径11.6cm，器高3.3cm。頂部に径2.7cm，高さ８mmの擬宝珠のつまみがつけられている。色調灰褐色，焼成良好で，周溝内４箇所より検出したものである。

６．蓋部の破片。つまみの径2.4cm，高さ1.1cm。色調灰褐色，焼成良好で，羨道部より出土。

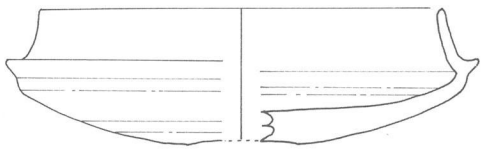
７．蓋部の破片。受部からして５と同時期のものと推定される。羨道部より出土。



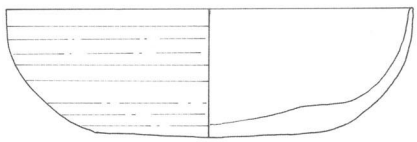
石 室　1



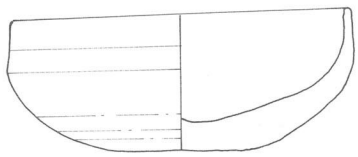
No.周24　2



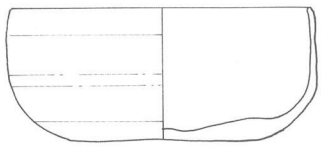
石 室　3



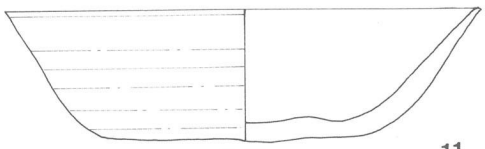
No.22,69　8



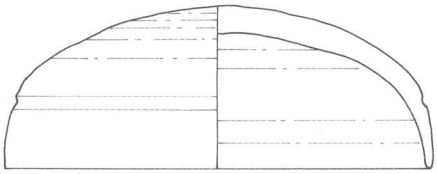
No.73　9



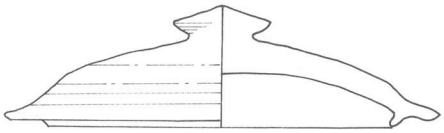
No.70　10



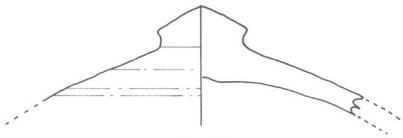
No.35　11



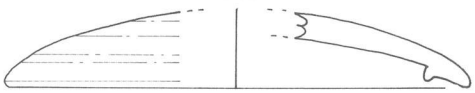
No.78　4



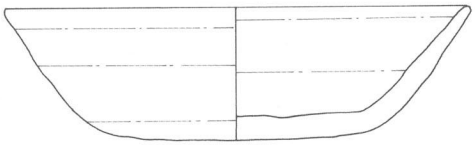
No.周19,22,24,29　5



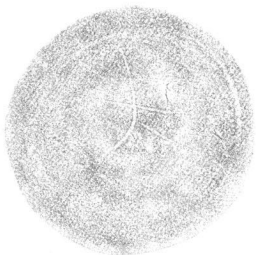
羨 道　6



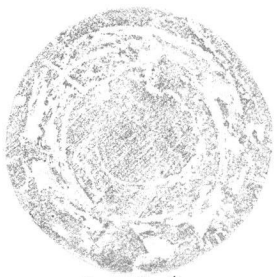
羨 道　7



No.34

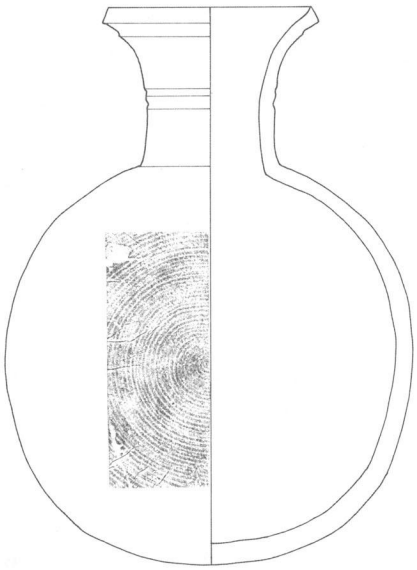


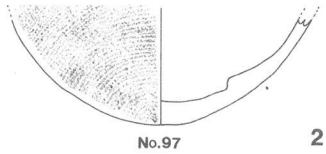
No.34の 内 底

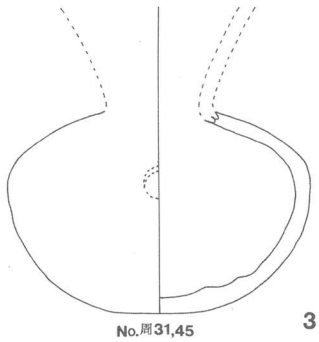


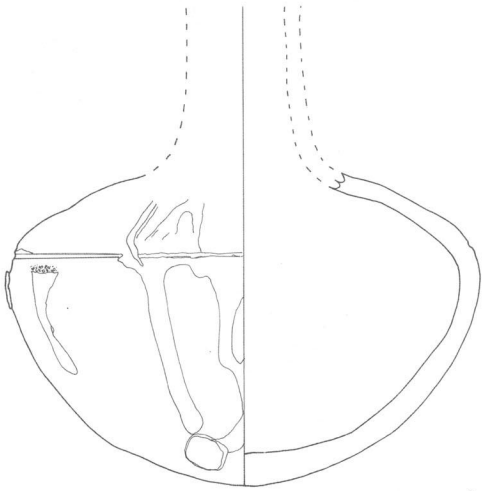
No.34の 底　12

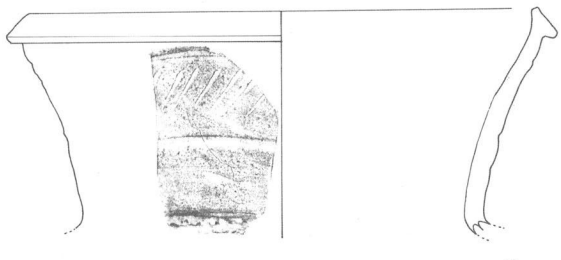
第12図　須恵器実測図　　杯（身）1～3，（蓋部）4～7，杯8～12（1：2）

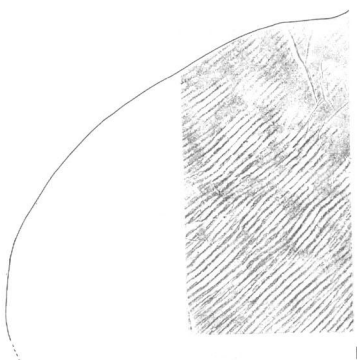


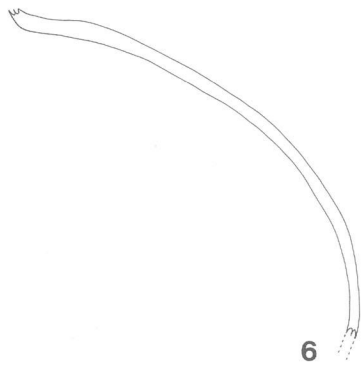












第13図　須恵器実測図　　提瓶1・2，瑞3，長頸壺4，甕5(1：3)甕6 (1：4)

杯　（第12図８～12）

８．口径10.8cm，器高3.4cm，底部に削痕がある。色調灰褐色，焼成良好。

９．口径9.1cm，器高3.6cm，底部篦削り。色調灰黒色，焼成良好。

10．口径8.1cm，器高3.5cm，底部篦削り。色調灰黒色で一部に自然釉が見られる。

11．口径12.6cm，器高3.4cm，底部篦削り。色調灰褐色，焼成良好。

12．口径11.9cm，器高3.4cm，底部篦削り。色調灰褐色，焼成良好。実測図下の拓本に見られるように，内部に「大」の字の印が書かれている。

提　瓶　（第13図１・２）

１．全長21.6cm，口径6.7cm，胴径15.1cm。横の部分に削痕がある。色調灰褐色。焼成良好。

２．底部破片である。提瓶特有な沈線の文様が施され、黒色の自然釉がみえる。

𤭯　（第13図３）

口縁部を欠いた𤭯である。胴径12.1cm，頸径4.5cm。胴部中央に径1.1cm程の円孔があったと思われる。周溝内より検出。

長頸壺（第13図４）

頸部を欠く長頸壺。胴径18.5cm，肩部に一条の沈線があり，底部は丸底。焼成良好。色調灰黒色で，肩部に自然釉がたれさがっている。羨道部より出土。

甕　（第13図５・６）

５．甕の口縁部である。径20.3cm，頸部の径16cm，高さ8.3cm。口舌は折返し，頸部中程に一条の沈線をめぐらし，沈線上部には篦による斜線が施されている。色調灰色，焼成良好で，周溝より検出した。

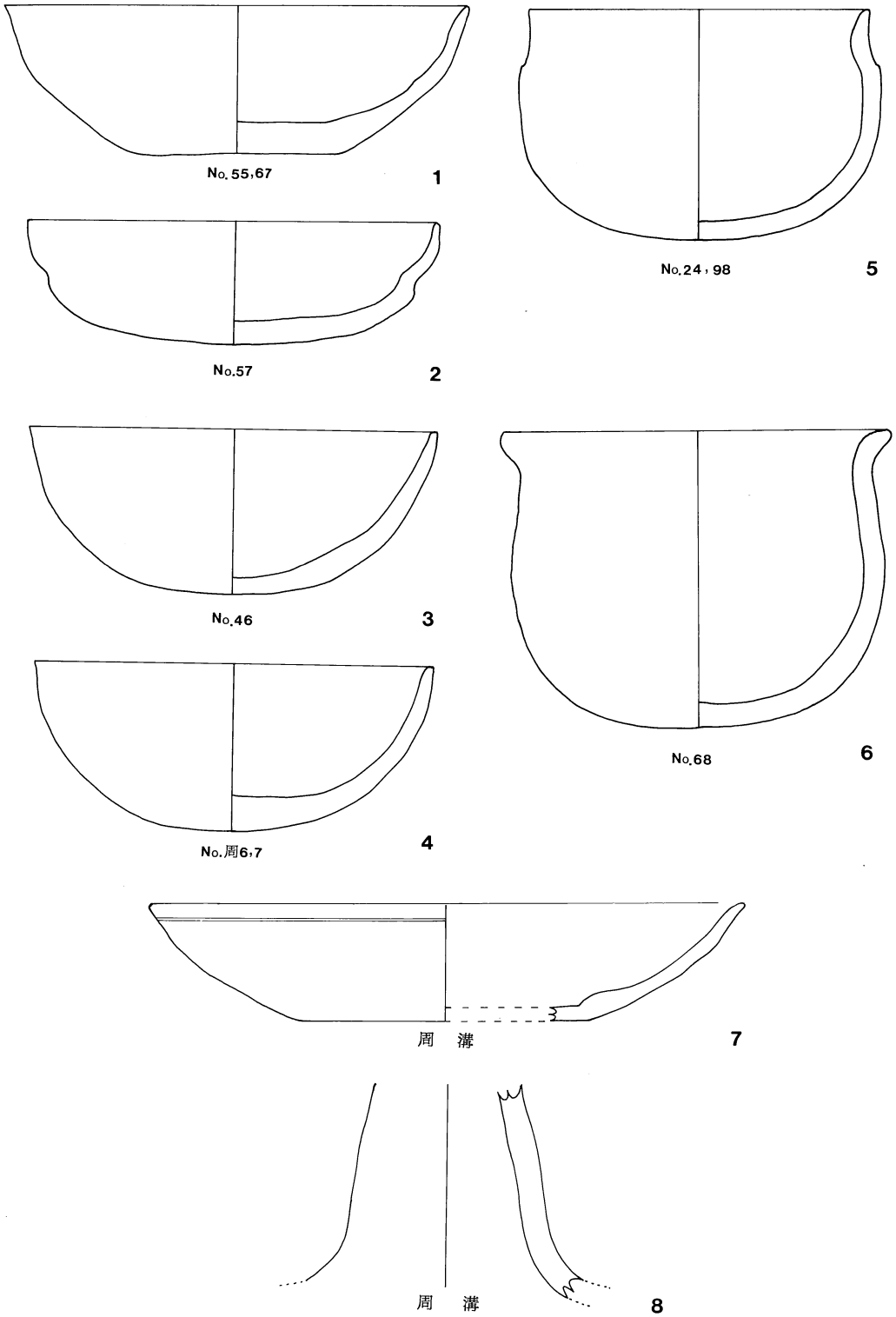
６．口縁部と底部を欠いた甕である。器面には平行叩き目文が施され，器面の半分は自然釉がかかっている。色調灰褐色，焼成良好で，周溝内より出土。

土　師　器（第14図・図版９右・10上右下）

杯　（第14図１・２）

１．口径12.4cm，高さ3.9cm。口縁部と胴部の間にわずか陵が窺える。内面黒色，底部篦削りで，石室内より検出。

２．口径12.4cm，高さ3.25cm。胴部に段を作り，底部は丸味を帯び篦削り。玄室より検出。



第14図　土師器実測図　　杯1・2，埦3・4，短頸坩5，小形壺6，高杯7・8（1：2）

埦　（第14図３・４）

3．口径12.2cm，高さ4.3cm，底部篦削り黒煙付着。内面朱彩土器で，玄室内より検出。

4．口径12.4cm，高さ５cm，器面篦削りの痕が残る。やや粗製の土器で，周溝内より検出。

短頸坩（第14図５）

口径９cm，高さ７cm，頸部の高さ1.3cm。胴部の最大幅11.1cm，器肉は６mmで石室内より検出した。

小形壺（第14図６）

口径12cm，高さ9.1cm，器肉７mmと厚目である。底部は篦削り，胴部は篦磨で，口縁部の調製はナデ仕上げとなっている。石室内より検出。

高　杯（第14図７・８）

7．口径18.1cm，高さ3.6cm，杯部の下部に陵をもつ内黒磨の高杯の杯部である。周溝内より出土。

8．高杯の脚部破片である。脚の中程がやや膨らみをもち，篦削調整で，周溝内より出土。

３）天伯古墳出土土器（第15図）

今回の調査中に石室内の封土中及び，周溝調査箇所より出土した縄文・弥生時代の土器の一部である。

1．隆帯に篦先で刺突文の縄文中期後葉の土器片。（石室内封土中）

2．地文が縄文に結節縄文と縦に隆帯を配した縄文中期後葉の土器片。（周溝調査箇所）

3．隆帯による渦巻文の縄文中期後葉の土器片。（石室内封土中）

4．無文で器面が荒い調整の縄文中期後葉の土器片。（周溝調査箇所）

5．地文が縄文で結節が入った縄文中期後葉の土器片。（周溝調査箇所）

6．地文が縄文篦描磨消文の縄文後期の土器片。（周溝調査箇所）

7．沈線が施された縄文後期の土器片。（周溝調査箇所）

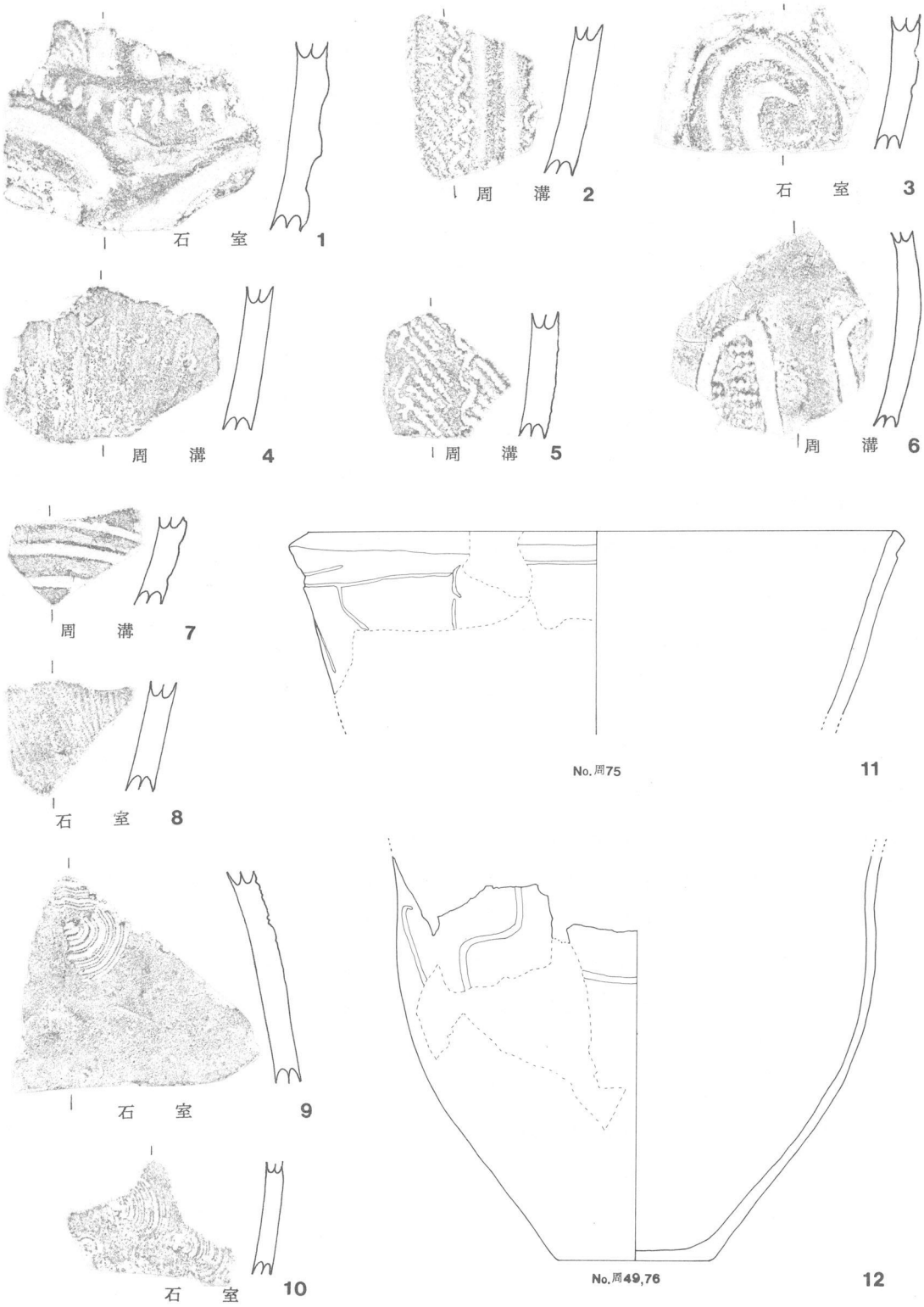
8．櫛状器具で施文された弥生後期の土器片。（石室内封土中）

9．波状文と$\frac{1}{4}$直弧文が施された弥生後期の土器片。（石室内封土中）

10．櫛状器具による$\frac{1}{4}$直弧文が施された弥生後期の土器片。（石室内封土中）

縄文後期の深鉢形土器（第15図10・11）

11．口径28.6cm，口縁部に一条の沈線文をめぐらし，器厚７mm。胴部は沈線による抽象的文様



第15図　天伯古墳出土土器拓影及び実測図　　拓影１～10(1：2)，縄文後期土器実測図11・12(1：3)

が施されており，周溝調査箇所より検出。

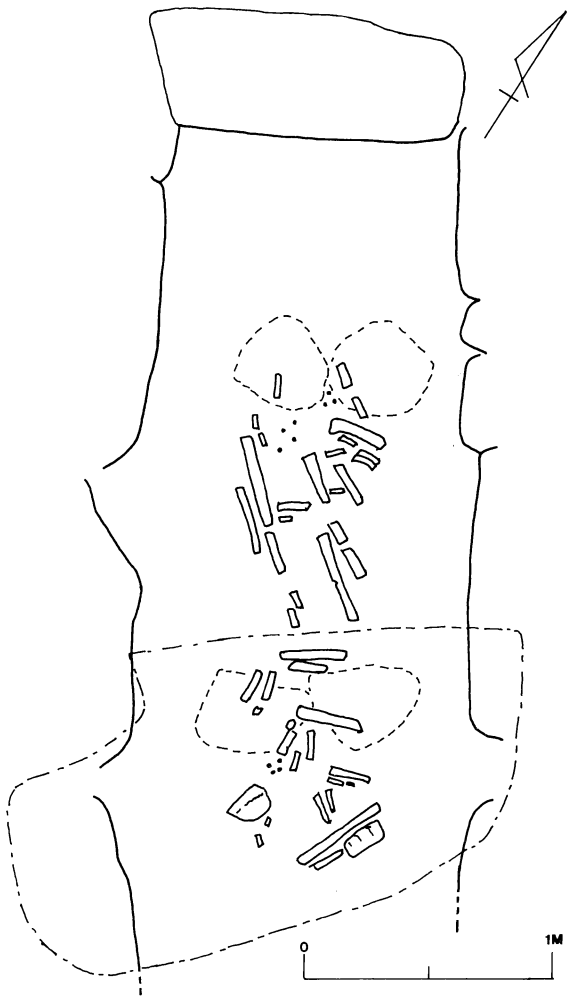
12．胴部以下のもので，器厚は５～６㎜。11の口縁部と同じ文様であるが，沈線の幅がやや広いため，同一個体かどうかわからない。一応別個体としたが，あるいは同一個体かもしれない。周溝調査箇所より検出。

第３節　天伯古墳出土人骨

天伯古墳から発見された人骨の出土状態は，下第16図にあるように，玄室の台石を中心として検出された。

発見された層位は床面上約20cm内外である。天伯古墳は後部の石室が約半分程取り去られていたので，人骨も攪乱をうけていると考えられていたが，幸いなことに攪乱をうけていないようであった。

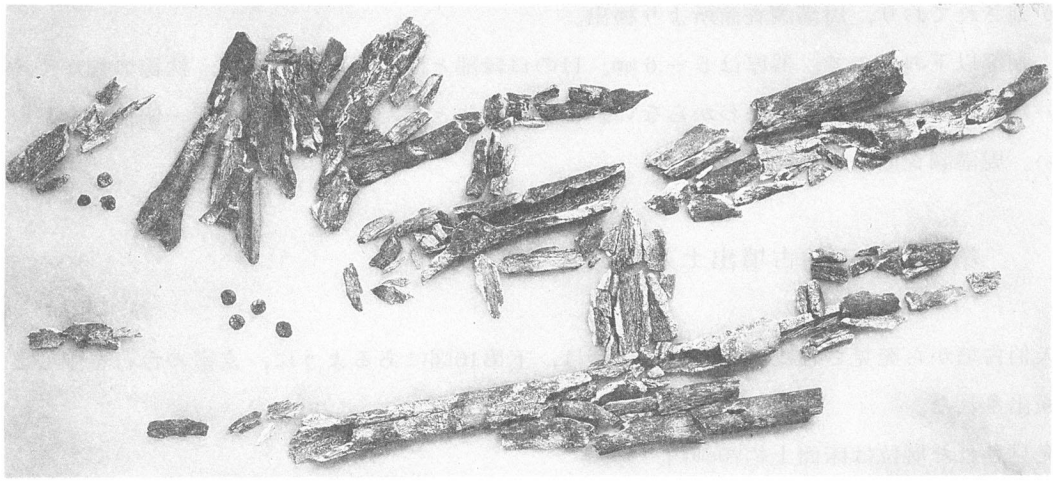
人骨は２体あり，１体は羨道に近い位置に埋葬されてあった。もう１体は，奥の台石の上に埋葬されたものと思われる。



第16図　天伯古墳人骨出土状況図

１）出土人骨　１（次ページ写真上）

奥の台石の上に埋葬された１の被葬は，人骨の有方からして玄室の中央に置かれた４個の台石の上に，割竹の木棺による埋葬方法をとったものと推定される。人骨の発見された位置は，石室内に流れ込んだ土などで移動しているようである。発見された人骨は上腕骨・大腿骨・脛骨・鎖骨・歯等で他の部分は腐食してしまっていた。



天伯古墳出土人骨　1

天伯古墳出土人骨　2

2）出土人骨２（下の写真）

この人骨は「人骨１」の前方羨道部に近い場所に発見された。「人骨２」の埋葬方法は,「人骨１」の様な割竹棺による方法ではないようで,（ＳＫＵＩＩ）が胴身体の中央部に落込んだ形と思われるところから，伸展葬でない形での埋葬方法ではないかと考えられる。また歯も（ＳＫＵＩＩ）の脇から検出されていることから，更にそうした色合が強い感じである。人骨の残存状態は「人骨１」と同様であるところから，追葬はあまり時間差がなかったのではないかと思われる。

人骨の性別については明らかにするに至らなかった。

所　　見

天伯古墳の調査については発掘の経過のところで概略述べたが，本古墳が今迄長い間古墳否古墳で議論されてきた最大の原因は，一つにはあまりにも破壊が古墳の原形を止めない程に進んでいたこと，いま一つの原因は天伯古墳の位置が前沢川の河原の中，しかも，現河川の高さと余り変らない底い位置に占地していたことが，今日迄古墳の確認がおくれてきた原因となったのである。しかし，現在中川村が文化財保護行政の一貫として，村指定文化財調査を行っている中で，天伯古墳の確認をしなければならない状態に至っていたのである。こうした事情があり，今回の調査に至った次第である。天伯古墳の調査に当って知り得た二・三の問題点について述べ所見といたしい。

1.本古墳の破壊についてはまだ古墳と言う意味がわからない江戸時代中頃より，石碑などに用いる石取場となっていたらしく，附近の石碑など古墳の石室の石を割り取った形跡が窺われる。そんなことから，石室内は盗掘から免がれたようで，副葬品や人骨は埋葬された状態で発見された。

2.墳丘は僅か西側に残っていたのみであるので墳丘の正確な復原は困難であるが，幸い南側の周溝が発見されたので，これと主軸の中心部とを結び図化して見ると経が18～20ｍの墳丘となる円形墳を復原することができる。

3.石室，本古墳は北の方向より西に23度の向に作られ横穴式石室である。石室に用いられた石は前沢川産の河原石で築造されている。石室の長さは8.75ｍ,巾1.4～1.6ｍ，高さ1.7～1.8ｍ石室構造である。石室の型式は下伊那史古墳篇ではＣ型式に分類されている型式で玄室と羨道との区別が明瞭でない。概してその平面は梯形である。この形を袖垂式と呼ぶ学者もある。上伊那・下伊那地方ではこの形式が甚だ多い。

4.副葬品の殆んどは石室内の床上10～20cm内外から発見されている。また，床上20cmからは篩いと水洗によって副葬品の検出を行った，ガラス玉などは水洗から検出されたものである。

人骨は部分的には腐蝕していたが遺体は頭を北にして葬むった形であった。副葬品は頭部附近と左右の脇に副葬品の分布図のような形で副葬されていた。須恵器・土師器などの献物品は羨道部が多かった。

圭頭は奥壁の手前より発見されている。直刀は，二個所から発見されており，一個所は人骨(1)の頭部附近と，人骨(2)の(手前)に追葬された手前北壁に接して発見された。おそらく副葬品も被葬者毎に副葬されたものと思われる。

5.本古墳の調査がもたらしたいまひとつの収獲は、石室内、及び周溝内から発見された縄文中期・後期・弥生後期などの遺物の発見である。このことについて，いろいろ論議された中で

とにかく，古墳の封土の採土は古墳附近から持って来たもので牧ケ原などから運ばれたものでないことは，墳丘に使用されている土砂は赤土などではなく，まったくの河原土であるところから，おそらく，古墳附近の土で築造されたと見るべきである。そうすると，これら遺物が包含された場所には当然遺跡が存在したことを如実に物語るものである。こうしたことが動機になり，松下昇氏が附近の調査をつづけられた結果，伊南農協選果所西側から縄文中期の甕類や弥生時代後期・古墳時代の遺物が採集されたことにより，前沢川の沖積台地はこうした時代の遺跡が存在することが確認されたのである。このことは，天伯古墳の調査がもたらした大きな収獲でもあったと言わなくてはならない。これらの調査が今年行われた中村遺跡の埋蔵文化財保護の調査につながっていったのである。

6.天伯古墳の築造の時期であるが，石室内，及び周溝から発見された須恵器編年から六世紀中頃と推定される。

7.天伯古墳の発掘，そして，今年行われた中村遺跡出土の堅錐1号古墳5世紀末，そして，アテネ工場敷地内の6世紀前半頃と推定される3基の古墳，中村の西段丘上にある六万部古墳七世紀代と，片桐古墳の築造は5世紀末，6世紀前半，6世紀中葉，7世紀の前葉と編年することができたのである。

8.今迄は沖積地に対する調査が不十分であったが，今後これらの成果をふまえて，もっと沖積地の遺跡に注目したいものである。

今回の調査にあたっては中川村北沢教育長・湯沢次長の並々ならん御努力と直接の発掘事務に当られた松下節子職員に対し調査団を代表し心から感謝の意を表する次第である。また，特に古墳の所有者である松下昇御夫妻には終始発掘並びに報告書作成に御支援を賜ったことを紙上をもって厚く御礼を申上る次第である。

調査団長　友野良一

参考文献

1．平出　平出遺跡調査会　昭和30．2．15
2．下伊那誌2巻　下伊那誌編纂会　昭和30．12．25
3．下伊那誌3巻　下伊那誌編纂会　昭和30．12．25
4．日本古考学講座5巻　昭和30．7．10
5．信濃資料　信濃資料刊行分　昭和31．3．31
6．日本の古墳　末永雅雄　昭和36．
7．加賀片山津玉造の研究　大場磐雄　昭和30．
8．上伊那誌　歴史編　上伊那郡誌刊行会　昭和40．10．1
9．日本の考古学　古墳時代　昭和41．12．1
10．日本考古学を学ぶ　昭和53．11．25

図　　版

図版 1

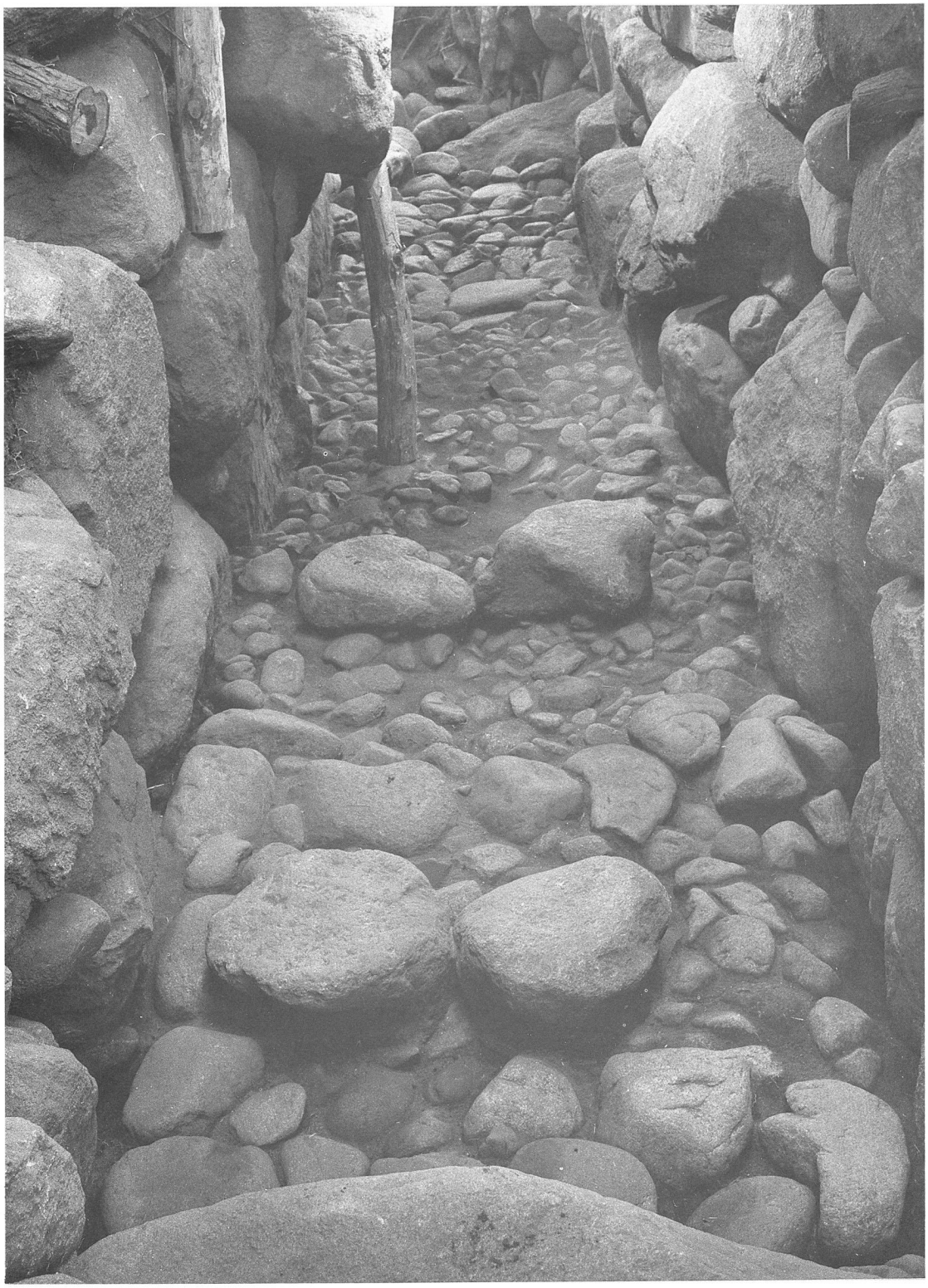
天竜川東より天伯古墳遠望

天伯古墳を西方より望む

図版２

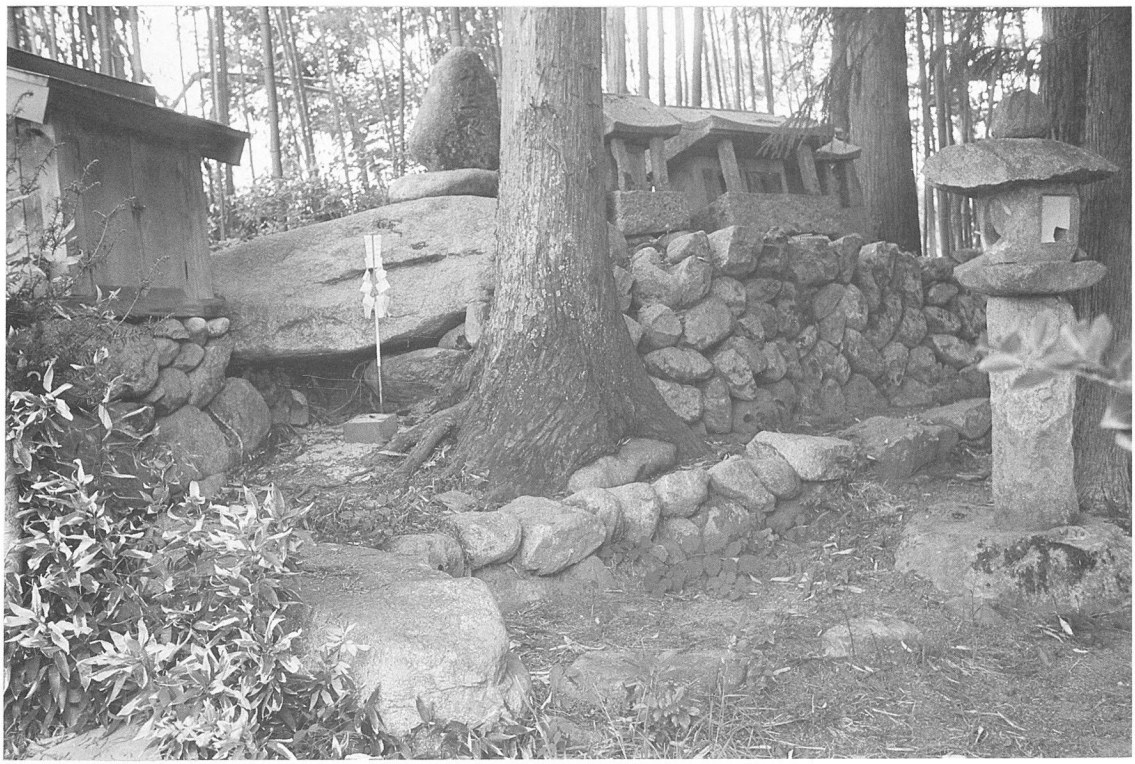
天伯古墳　天井石・石室内（奥より望む）

図版３

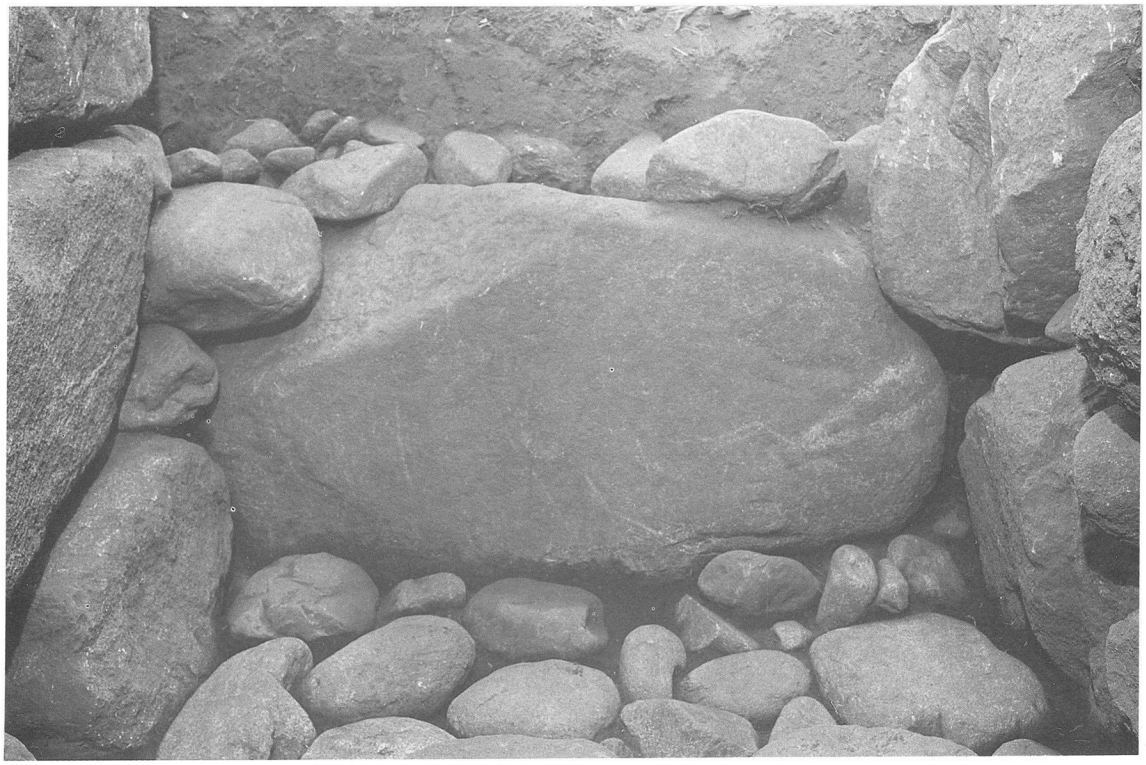


天伯古墳　石室内部（奥より望む）

図版４

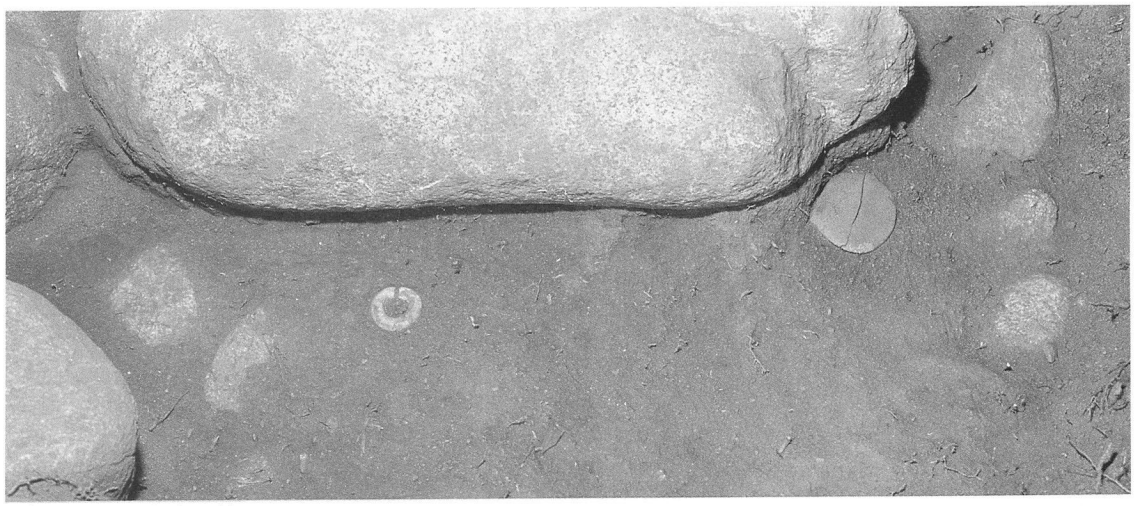


石室前方より



奥　壁

図版５

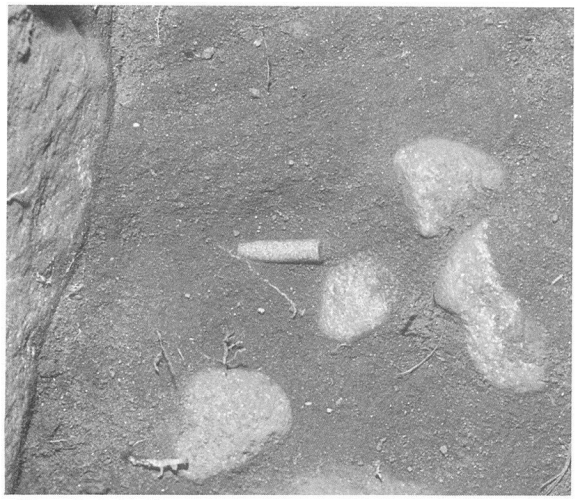


金環，砥石出土状態

直刀出土状態

須恵器，刀子出土状態

図版６



管玉出土状態

鉄鏃出土状態

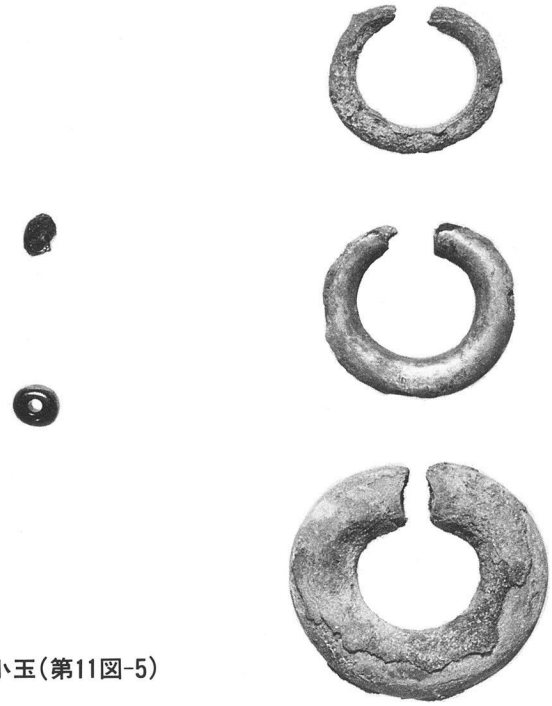
圭頭出土状態

須恵器出土状態

人骨出土状態

直刀出土状態

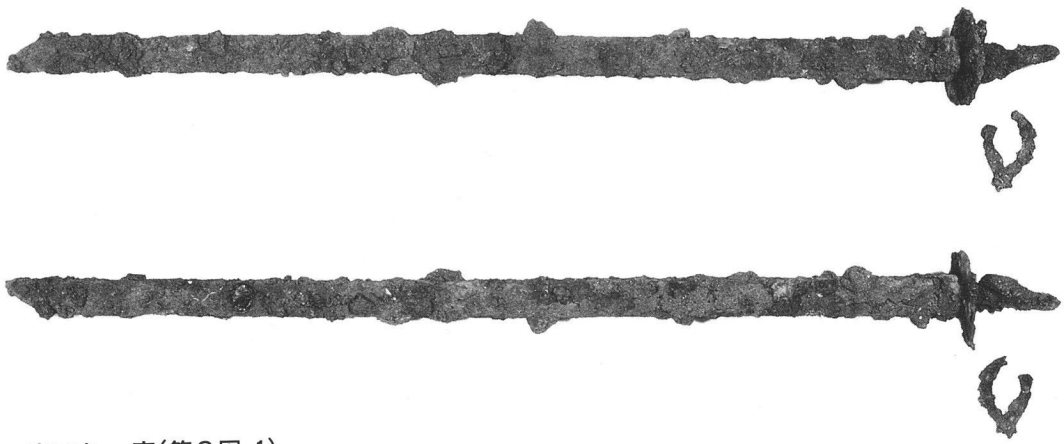
図版７



ガラス小玉(第11図-5)

管玉(第11図-4)

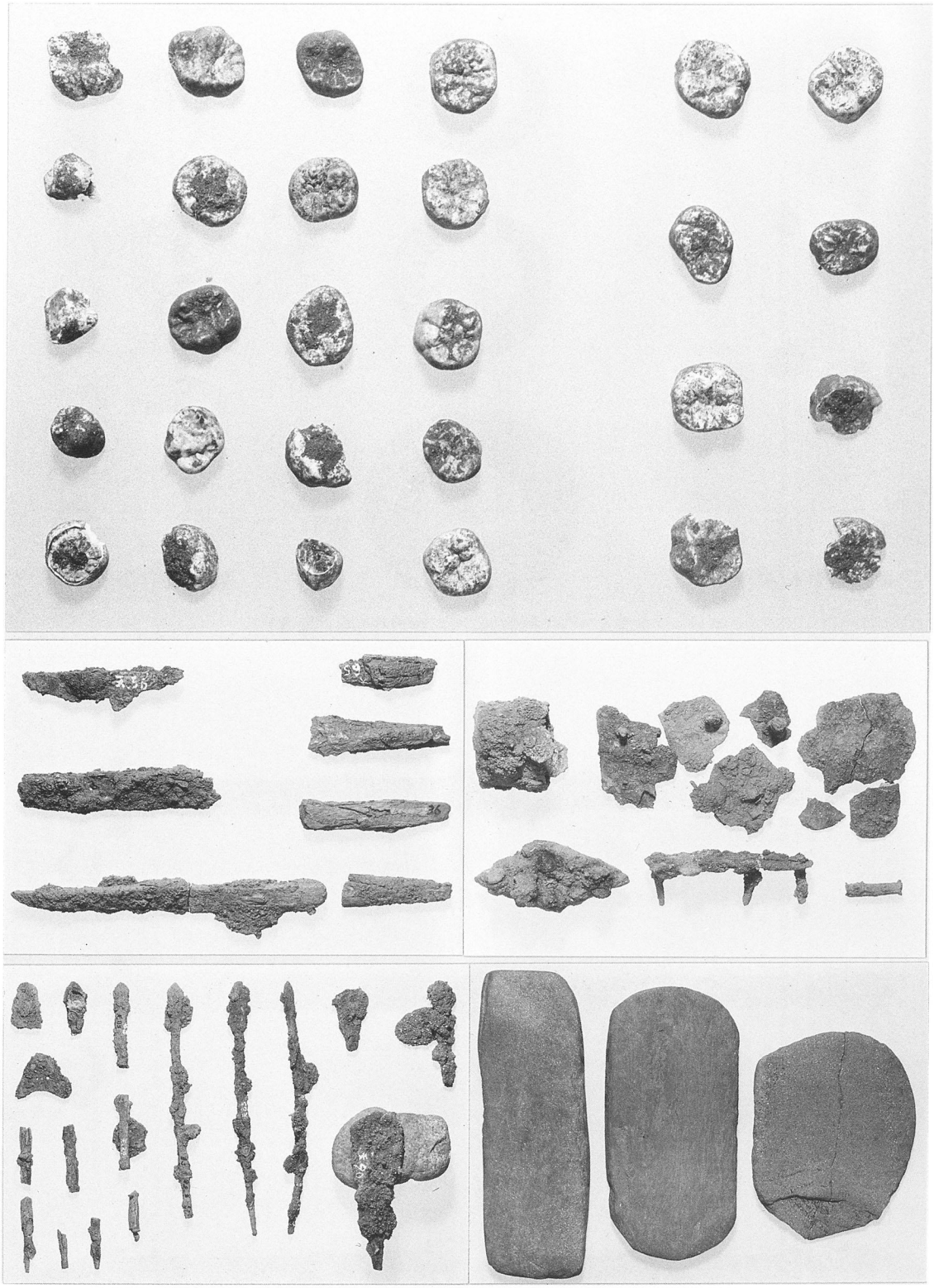
金環上・下(第11図2･1) 銀環中(第11図３)



直刀表 ・裏(第９図-1)

直刀表 ・裏(第９図-2)

図版８

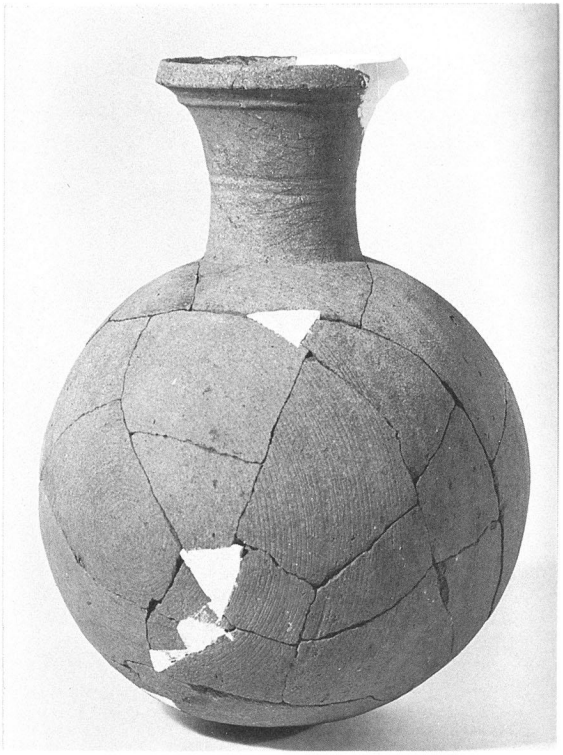


歯（上）・刀子（中右）（第11図-14～17）　鉄器（中左）（第９図-６～９）
鉄鏃（下左）（第11図-１～16）・砥石（下右）

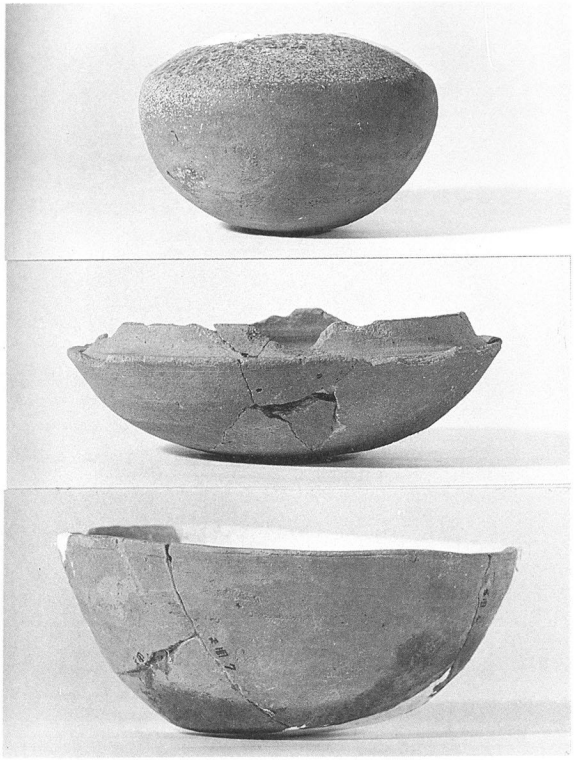
図版９

須恵器1(第12図-5)　2(第12図-4)　3(第12図-10)　4(第12図-9)　5(第12図-8)　6(第12図-12)
7(第12図-11)　土師器8(第14図-2)　9(第14図-3)　10(第14図-1)　11(第14図-5)　12(第14図-6)

図版10



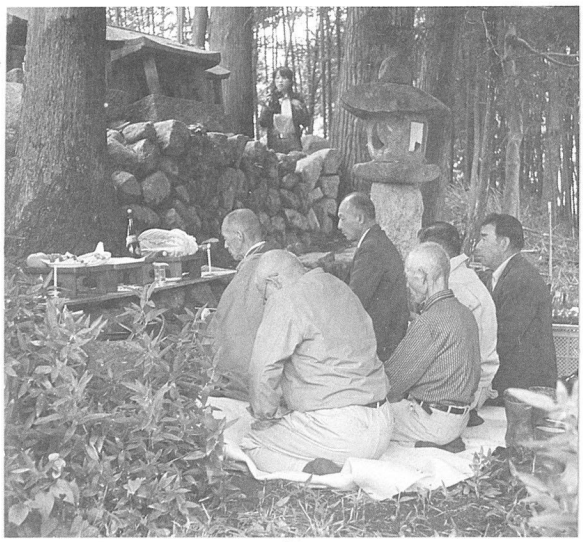
提瓶(第13図-1)



須恵器(上)(第13図-3)・(中)(第12図-1)
土師器(下)(第14図-4)

石室 (前方より望む)

天伯古墳



祭

あ と が き

天伯古墳発掘調査報告書が，ここに完成の運びとなりました。

河川敷内に天伯古墳の存在を明らかにした今回の調査は，この地の歴史を知るうえでも大変みのりのあるものでした。

発掘調査中，現場には多くの見学者があり，調査が終了した時点で一般公開し村民の方々や担任の先生に引率された小学生も勉強に来られました。また，調査速報を発行するとともに，村の歴史民俗資料館の昭和59年秋の特別展の一部に，出土遺物や写真パネル等を展示し，現場に来られなかった方にも見ていただくことができました。

調査終了後，調査委員会等で話し合い，石室については既に天井石と側壁の一部がそれぞれ破壊されており，今以上の破壊を防ぎ，石室の保護を考慮して，再び土を埋め戻し，さらに上に土を盛って古墳の復原をしました。現在石室内部を見ることはできませんが，本報告書と共に，遺物や実測図・写真は中川村歴史民俗資料館に展示・保管されており，いつでも誰でもが遺物を見，考察できるようになっております。

本調査にあたりましては，石室内での危険の伴う作業を含めた発掘調査と報告書作成にあたって，精力的にご指導をいただいた友野良一先生をはじめ，調査員・作業員のご労苦に，また所有者の松下昇氏の御協力に厚くお礼を申し上げます。

この報告書が今後の調査や遺跡保護に生かされることと，伊那地方の歴史解明に役立たれることを願ってあとがきといたします。

昭和61年５月

中川村教育次長　　石　　原　　　　守

天　伯　古　墳　長野県上伊那郡中川村天伯古墳

昭和61年５月

発　行　　中川村教育委員会
長野県上伊那郡中川村

印　刷　　㈱オノウエ印刷
長野県下諏訪町5311-1